理学部支部
５０年の歩み

京都大学職員組合理学部支部
５０周年史編集委員会

目　次

１．５０年の歩みを発行するにあたって・・平田　龍幸理学部支部委員長

２．理学部支部略史
　１）１９４６年～１９６０年・・・・・・・・・・・・中山　勇
　２）１９６０年以降・・・・・・・・・・・・・・・・冨田　克敏

３．歩みのあとを振り返って
・理学部支部役員をした頃の思い出・・・・・・・・・永田　忍
・理学部支部の活動－想い出すこと・・・・・・・・・志岐　常正
・学部当局と組合支部・・・・・・・・・・・・・・・冨田　三朗
・理学部支部５０年と教員の任期制・・・・・・・・・加藤　利三
・思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・池田　ひろ子
・主任問題、ベトナム解放、そして告白・・・・・・池内　了
・定年後５年雑感・・・・・・・・・・・・・・・・・田中　正
・京都大学職員組合理学部支部とその後のこと・・・岩槻　邦男
・好きやったなぁ、あの顔、あの支部長・・・・・・春日井　昇
・雑感と近況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小暮　智一
・１９８１年度、１９８２年度の
　　理学部支部書記長を担当して・・・・・・・・・大槻　義実
・理学部支部と理学部長選挙・・・・・・・・・・・清水　大吉郎
　　京都大学理学部長選挙制度の歴史
・二つの事件と大学の自治…田隅　本生
・１９８６年度～１９８８年度の思い出・・・・・・東　敏博
・支部ボックスの床・・・・・・・・・・・・・・・宮地　英紀
・理学部支部５０周年記念に寄せて・・・・・・・・平井　栄子
・科学に寄せる思い・・・・・・・・・・・・・・・吉村　洋介
・思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・齊藤　広佳

４．一口メッセージ（５０音順）

５．年表

６．理学部支部歴代四役（敬称略）

７．．編集後記

１，５０年の歩みを発行するにあたって

平田龍幸（理学部支部委員長）

ご紹介にありましたように、現在、理学部支部委員長を１１月から引き受けています平田と申します。 実は、その前に化学分会の平田文男さんが支部委員長をやっておられたのですけれど、岡崎の分子科学研究所に移られまして、非常に理不尽なことに、その穴埋めのために、改めて、選挙を行いまして、同姓の私が見事当選いたしました。

この五十年、私はそれよりも少し年を取っておりますけれど、理学部支部について、私の知らない期間も長いのですが、少し過去を振り返って、又現状をご紹介して、パーティーの話題提供にでもさせていただきたいと思います。

お手元に理学部支部五十年の歩みという資料がございますが、現在、五十周年編集委員会の方で、（今日には間に合いませんでしたが、）１年ぐらいじっくり腰を落ち着けて過去のことをちゃんとまとめてみようということで、作業が始まっています。現在までに支部の年表とか歴代の四役名簿とかが出来ていますのでそれを元に振り返って見たいと思います。元々は、戦後五十年、支部五十年という二つのテーマがあったのですが、残念ながら戦後五十年の方は、時間が無くてあまり議論がなされていません。

少しだけ私の五十年の感懐を述べさせて頂きます。私、昭和１６年１２月に生まれまして、昭和２３年に小学校に入学しました。そのころに民主主義教育を受けたんですけど、今になって考えますと、その時の小学校の先生をはじめとして民主主義とは何か良くはわからないままに、教科書通りに教えて下さったのだろうと思います。そういう意味で形式民主主義といいますか、かなりかっちりとした形の教育だったと思います。いまだに多数決、民主主義が私にとっても非常に大事なものだと思っています。

その頃文部省をはじめとして、民主主義は何かということを国民に宣伝するということがございました。昨年１２月８日の朝日の天声人語に載っておったのですけど、広島の国際会議「希望の未来」という中に民主主義ということが沢山書いてありました。その中で、私の気になる所をあげますと、文部省自身が昭和２３年か２４年に、民主主義を単なる政治のやり方ととらえるのは、間違いである。根本はもっと深いところにある。其れは人の思考の中にある。そういう書き出しで始まっている。人間の尊重ということを根本の精神とする民主主義はなによりも人々の個性を重んずると説き同じ人間が長い間大きな権力を握っていると、必ず腐敗が起こり、堕落が生じる。元来、その時々の政策が教育を支配することは、大きな間違いの元であり、政府が教育機関を通じて国民の道徳思想まで、一つのことにはめようとすることは最も良くないことであると文部省自身が書いています。その後の流れは明らかにこれから大きく逸脱して、組合の問題にしても日の丸の問題にしても、アメリカから輸入の民主主義ということがあるのでしょうが、だんだんと日本的に変質していき、場合によっては民主主義とその他のものが混ざったような形で進行しているように思えてなりません。

さて、時間もございませんので理学部の話を致しますが、お手元の５０周年の歩みの中に、支部四役の名前が出ていますが、この方々のみで支部活動が行われた訳ではありませんが資料が揃いませんので便宜上四役のみにしています。例えば支部長の名前で言いますと７１年が永田忍先生（後に中村輝男さんと判明）～８５年の米田満樹さん、その間に分からない箇所がいくつかあります。本日の参加の方で抜けた部分を思い出される方がありましたら是非教えてください。１９７０年以前のこととなると資料が揃っていない上に、この辺りの人は定年退官されている方ばかりです。８０年代は、現役と申しますか、学部の方で色々と活躍されています、尾池さん、益川さんはついこの間までは評議員、学生部長も経験されています。７０年代前半の伝説の時代は、ときに話をうかがうこともありますが、まとまってはよくわかりません。是非、パーティーの席にて、諸先輩にお話しいただきたいと存じます。私が年表に登場したのが７９年ですから、その辺りからだと私も知っておりますが、それ以前については年表を参考にして、現在の理学部支部の環境と言いますか、色々な意味での環境に影響したと思われるものついてピックアップして振り返ってみたいと思います。

１９４６年２月１３日に理学部支部を結成しています。その４６年１１月に日本国憲法、あるいは教育基本法、学校教育法、労働基準法。４９年には教育公務員特例法の制定等、そのあたりに日本の学校教育の骨格を作る色々な法律ができていますが、実はすばらしいことに、我々支部はその前にすでに誕生しています。その後日教組の誕生、４８年３月に京大職組は全学単一組織になっています。関連事項を挙げていきますと５５年に第１回日本母親大会、第１回原水爆禁止世界大会の開催、５９．６０年は安保闘争６２年は第１回科学者京都会議の開催。６７年に政府が定員削減の発表、６８年から大学紛争が始まりましたが、定員削減は今でも我々にしばりをかけています。大学紛争については、色々の見方があるとは思いますが、例えば宇宙物理学教室では、対応するために、教員全員の会議で物事が決定されるようになったように、他の教室でもその後の運営体制に影響した部分もあると思います。

私が記憶する一番苦い思い出と言いますと、８３年の理学部長選挙制度の改悪で、行政職員の人たちが選挙権を失ったことです。その時から行政職員による自主投票は現在まで行われており、一定の影響を与えております。個人的に思い出しますのは助手の講師への振り替え運動を頑張った記憶があります。私も若い頃で、富田三朗さんからここが間違っているとご指摘を受けたこともありました。この課題は、いわゆる理科系の倍増の時のひずみが、長期間の助手境遇となってはねかえり、いかんともしがたい状態を打開すべく提起された運動でした。この状態は倍増期に昇進した人達が定年を迎える時期となり、OD 問題とともに一時的には時間が解決したようです。これに関連することとして教務職員の助手への振り替えがありますが、これについては後で触れることに致します。

それからもう一つ、７６年に週休二日制が試行され、完全実施になるのは８９年ですが、私自身は休みが増えるんだから、組合運動が活発に展開できて、組合員はもっと増

えるのだろうと思っていましたが、これは非常に甘い考えでした。土曜に何かやろうと思うと集まりが悪い、会議は週日に、ということで、かえって時間がなくなりました。やはり、魅力ある組合活動という原点に戻る必要があります。

過去五十年を振り返ってみますと、組合が活動をしたのはどういう時期かと言うと、大学紛争などを含む、いわゆる乱世の時代に重要な働きをしたようにと思えます。長い間の組合の重要課題である定員問題、定員外職員問題については、１９６７年以来の定員削減が残念ながら進行し、ますます困難な状況にあることを認めざるを得ません。

さて、諸先輩もおられることですので、最近の理学部をめぐる状況を紹介致します。
最近の出来事としては、９４，９５年に理学部が大学院重点化となり、我々は大学院に所属し、学部に出向すると言う形に変わりました。内容は２５％の校費の増と教授・助教授ポストへの振り替え、大学院生の倍増、行政職員の増加は無しと言うものです。この時に全学的運動があって理学部でも教務職員ポスト７名全員の助手への振り替えが実現しました。但し、実際に全員が助手に振り替わったのは２，３年後になりますが。

定員を巡る最近の問題は技術系職員が後数年で大量に定年になります。
理学部における技術系職員をどうするかが大問題となっています。それから、非常に残念なことは定員外職員（総長発令者）が現在１５名迄に減りました。定員化が急務ですが、見通しは明るくありません。教員の任期制の導入も浮上し、大学、理学部内外の情勢は決して明るくありません。

最後に、現在の支部の現状を報告致します。組合員は１４５名です。多いときは２００名を越えておりましたが、現在は１４５名の内、教員が８３名、行一技官が１２名、行二技官が２名、組合の中核を担っています行一事務（図書含めて）は１０名、総長発令の職員が９名、時間雇用職員が２９名と、行政職員の中では一番多いのが現状となっています。最近、物理とか化学で若い助手の組合員が増えて、いまや地鉱分会は沈滞、化学分会が上昇期にあるといったところでしょうか。
色々な運動を展開して、過半数を組織するにはかなりしっかりやらないといけません。一方で、若い方も増えていますが、成果が勝ち取れない今日の状況の下では組合運動は難しい局面にあります。毎年、試行錯誤を繰り返しているのが、実状です。

私なりに５０年を振り返っての話題提供と言うことで話を終わらせてもらいます。
（拍手）

2, 理学支部略史

1)、1946年から1960年

中山　勇

１９４６年、工学部に職員組合が結成された。工学部の結成総会は、第一共同講義室で行われ理学部からも、かなりの人数の人が傍聴に参加した。理学部では職員組合をつくる動きは、工学部と大体同じ時期に開始された。理学部では、植物学教室の新家浪雄教授らが動き、地鉱の槇山次郎教授らと行動を共にしようとした。元来この人たちは、組合活動とは無縁の人たちなので、まわりの人々は彼らを警戒した。

これに対して、動物学教室の人などが、職員組合をつくろうとした。この後者の人たちの動きが、理学部全体に波及した。昼休みの時間は、動物学教室や植物学教室の講義室で組合をつくるための会合がもたれた。組織形態を open shop にするか、closed shop ないし union shop にするかといった形態論にかなりの時間をかけていた。当時２０代の私は、年輩者の形態論議をうんざりして聞いていた。理学部支部は１９４６年４月頃結成され、事務室の事務職員はもとより教官、そして大学院特別研究生は全員（それ以外の院生も一部ふくまれた。）職員組合に加入させた。

組合が結成された１９４６年、そして翌１９４７年などは、食糧不足・衣料不足で、闇市場に”サツマ芋”などを求めて出あるき、物価は大インフレで、給料は月毎に自動的に増額した。これに対して、組合は何ら有効な手は全くとらなかった。１９４６、１９４７年頃は、生命維持のため休暇をとって食料の調達にゆくことを認められていた。多くの企業で労働者のストライキが行われた。敗戦によって、権力側が統治能力に力をもたない間は、大衆運動は高揚したが、占領軍の政策が右傾化し、権力が回復すると、大衆運動は守勢にたたされた。

１９４７年２月１日、全国的ストライキは、占領軍命令で中止させられた。スト中止は、NHK のラジオ放送を使って伊井弥四郎が全日本に伝達した。翌日の朝日新聞には、マイクの前でうなだれている伊井氏の写真を第一面にのせ、「泣くな全逓の友よ」と大きな見出しをつけた。現在の朝日新聞からは考えられない記事で、ストに全面賛成したのです。政府は１９４７年に大学管理の法案を準備し始め、１９４８年に大学管理法案を文部省が発表した。京大職組は、大学法案に反対の意志をあらわし、法経４番教室で抗議集会をもち、１日ストを行って、デモ行進した。このときの支部長は、化学教室の田中正三（生物化学）、大学法反対の運動は１９４９年に更に高揚したが、数学教室の講義室で、田久保寳太郎を議長にして開催した理学部全体集会で、教授層と助手層を中心とした若手層との間に、斗争方法をめぐって意見の対立が生れた。１９４９年になると、大学法と共に、文部省は教官の定員問題を持ち出して攻撃してきた。１９４８年に副手制を廃止して、副手を全員助手にした。当時、理学部内では、教室事務や図書司の仕事を行う人を助手ポストにおき、研究を行う人を副手とするという人事が、動植や地鉱などでやられていた。

副手は官制にないポストで、教室の意向（教授の意向としてもよい）で、何人もおけた。それが全員助手になって助手が増員になった。文部省は増大した助手ポストを減らしたい、そして助手ポストの一部を講師に振り替えるという案を出してきた。理学部内では、化学教室の組合員が賛成にまわり、物理学教室をはじめ他の教室は反対で。組合内で方針が対立した。しかし、反対だった地鉱教室が崩れた。１９５０年３月に大阪市大理学部に地学教室が創設されると、助教授１，助手２が転出、それに続けて、助手３が創設された新制大に転出し、事実上、地鉱教室は文部省の削減策を受け入れたことになってしまった。１９４９年から１９５０年にかけての、理学部内での対立が、組合員の脱退のもとになった。それに、政府の圧力があり、時計台の事務室の職員を中心にした第２組合結成はそれに呼応した。理学部事務室の職員の脱退があり、理学部支部は急速にその闘争力を減退させた。

１９４９年３月、京大医学部付属看護学校（現医療短大の前身）の学生３名が、在学中の自治会活動を病院当局にきらわれて不採用になった事件が起こった。（東大でも全く同じことが同時期に起こった）同学会は看護学校自治会に対する内政干渉として、卒業生の不採用取り消しを求め、徹夜団交を病院当局と行った。この交渉の継続中に、病院当局は京都府警の学内（病院構内）への出勤を要請した。戦後最初の警察の大学への介入で、交渉にあたっていた京大生３名が逮捕され、その１人に理学部学生佐藤昭夫（のち参院議員）が入っていた。彼は、気象学専攻で大学院に進学する予定にしていたが、この時のことで、滑川教授から進学をたたれ、高校教師への道をとった。京大職組は、交渉の場に直接おらなかったが、警察の学内導入に反対して、学生と共に阻止のスクラムを組んで共闘を行った。

１９５０年４月、職組の中央執行委員会は交代すると、看護学校不採用問題について調査を行った。私は５０年４月から中執委員となり、この調査にかかわった。数人の調査員の質問に対し、庶務課長は、後に有名になった発言「庶務課長関知せず」で、全くの病院当局・医学部の問題だという。４月中旬、衆議院議員団の調査も行われた。中執も議員団と懇談をした。そのとき、共産党の今野議員から、「東大と京大と同時期に、全く同じ問題を起こしたが、京大当局の対応の仕方は東大にくらべて陰湿である。」という指摘をうけた。

今野議員の指摘は、京大のことを考えるとき、その後いつも私の頭の中にあった。

６月に入ると、朝鮮戦争が始まり、メーデーのデモは警察隊におそわれる。円山公園で集会しようとすると、すぐ警官隊がやってきて、「直に解散せよ」である。しかし、反動攻撃への対応ばかりではなかった。私は、職組の仕事の合間に、研究用に岩石を一定方位に切断する労働をしていた。空腹が身体にこたえる。

労働者への加配米支給は、府庁による。それで、理学部・工学部の工場、植物園の技術職の人たちに、加配米支給の申請を呼びかけにまわる。このとき、工学部の技術職の人たちと知りあったことが、後に私が中執の副委員長になり、工学部の組合の斗争支援で団体交渉を行ったとき、大変役に立った。工学部・理学部の各教室の技術職の人たちの署名と、両学部の支部長（理学部は武藤二郎）の請願書をもっ

て府庁に１４～１５名で押し掛けた。
自分の自由意志で、岩石を切断する私は対象外であったが、署名を提出した全員に加配米が配給になった。米を手に入れるために、着物などを農家に持参してやっと入手していた頃である。こんな要求闘争は、文系の教官には思いもつかないことで、些細な要求であるが、組合員の生活に役立つことは、何でもするのが組合なのである。

１９５１年、大学管理法案は廃案になったが、政府は単独講和に走り、１１月に天皇が京大にやってきた。学生は、”平和を守れ”の歌を唄って出迎えた。学生側に責められるべき行動は全くなかった。天皇は象徴であって、学生側は主権者である。学生を警察隊が襲撃した。同学会の代表が処分された。明治憲法が頭からはなれない教授たちのなかに、「土下座してお迎えすべきなのに、不敬である」といきまく人もいた。

１９５２年、政府は破壊活動阻止法案をだし、われわれは反対した。東京では皇居前広場に集まったメーデー参加者にむかって、警察隊が鏡を発射するという、とんでもない事件がおこった。当日、広場にいた哲学者の寺沢さんが、理学部動植物学教室会議室で、皇居広場での事件の報告を行った。京都でもメーデーの集会後、毎年のように、街頭をデモするデモ隊に向かって、警察隊が襲撃してきた。そのため、乱闘となったが、京都市民は、デモ隊参加者をかくまったり、逃走の手引きをして応援してくれた。

この年、「教養部構内で火炎瓶が発見された」という。京都府警の言いがかりで、書記長の千葉さんが、不当逮捕されるという事件が起こった。このデッチ上げ事件によるショックで、組合をやめてゆく人が出た。この事件は、千葉さんの釈放で一応の決着をみるのであるが、決着するまで日時を要した。中央代議員会で、この事件の説明がなされた。中央代議員（理学部選出の）であった私は、支部に持ち帰った、その報告を支部委員会で行った。支部長は、藤波　重次（宇宙物理）さんであった。

保守化・反動化してゆくなかで、つぎつぎと打ち出される政府からの攻撃への対応に追われ、自分たちの主体的運動を展開できないでいるもどかしさを、当時の人たちは誰もが経験したことである。組合員は減少して闘争力は落ちている上に、１９４８年に公務員の争議行為のうち、ストライキは禁止され、給与の改訂は人事院勧告をまって、政府が行うという枠を押しつけられ、給与問題で有効な手段がとれない状況であった。年末一時金の引き上げを要求し、人事院勧告に上のせをかちとるために、学長室前の廊下に、５時以降にすわりこみをしたり、花谷会館の２階につめかけて、座り込むという戦術しかとれなかった。

中執委員会のメンバー交替は、毎年大会時に行われた。５３年のときの大会で、前委員長の島　恭彦氏が、「組合は無いよりは、このように人が集まるというだけでも存在の意義がある」という挨拶がなされるという象徴的なことがあった。

しかし、同学会に結集する学生の運動は活発で、保守化する大学当局との間に緊

張関係があり、５５年に滝川学長事件があって、同学会に解散命令が出た。もっとも、学生との緊張関係を憂慮した結果であろう。医学部の平沢　興学長が送出されると、学生に理解がある芦田元理学部長が、学生部長になって、同学会との緊張をとこうとする一連の方策がとられた。全学にむけての学生との対立に対する意見公募などである。

１９５７年頃、私の給与のことで通産省にいる友人から、人事院に提訴してみる必要があるといわれた。２～３年前に、時計台下にいた住友人事課長に、私の給与表について話したとき、納得できないでいたので、人事院大阪支所に私は直訴したのである。すぐに大阪から、係官がやってきたが、私と話し合う前に、人事課長や事務局長と、かなり時間をかけて調査と調整をした後であった。そうだろうとは、前から予想をしていた。「課長とお会いになってこられましたね」というと、率直に認め、しばらく調査の結果を説明して、大学の事務当局が手落ちがあったことを認めた、是正の方針を説明した。このことは、私が予想したよりも大学とくに理学部の事務室にショックを与えた。事務局長室で事務局長と住友課長、人事院係官と私の４人のいる席で、住友課長が給与表の読み方で理学部事務室に引継を怠ったことをわび、事務局長も許してやって下さいという。特昇枠とは別に、特昇を年２回やり、さらに翌年別枠で特昇をするということで、人事院提訴の件は落着したが、６０年３月私が、支部長になったとき、日教組本部から人がきて、事務室職員を組合に加入させたいので、事務室で話をさせて欲しい」という。それで、昼の休み時間に本部の人を理学部事務室に案内して室に入ると、室内は緊張した顔ばかり、「また人事院提訴か」「今度は何が問題になるのか」という話声が耳に入った。私が「今日は日教組本部の方が、是非みなさんに話をしたいといわれるので、話をきいてあげて下さい。」というと、安心した顔で、２０分位の話を聞いていた。

官庁の立前と実際とはちがいがある。よくしらべてみると、すべての役所にあると言っても過言でない。このごまかしを、つくことは民衆の生活を守る上で、重要なのである。国会での政府と政党とのやりとりの中で、共産党の質問が、他の党のおよびもつかない具体的問題を数字をあげて質問し、政府側を答弁不能においこんでいるのは、この点にあります。京大病院などは立前と実際が余りにもちがうので、追求がしやすかった。

組合活動の転機は、１９６０年の安保条約反対闘争を軸にした、主体的闘争によってである。５９年末から、６０年２月にかけて、私は数回、円山の集会に参加した。しかし、京大職組からの参加は、いつも４～５名であったが、私と専従初期の奥井さんを除くと、少数ではあるが、いつも顔ぶれがちがっていた。奥井さんに、そのことを話し、延べ人数にすれば、決して少数ではないから、日常要求とくみあわせてれば、かなりのエネルギーにはなりうると話していた。

１９６０年３月１２日に、物理学教室の浅井さんが、室に訪ねてきて、「今年度の支部長をあなたに引き受けてもらえないか」という。そして、浅井氏は本部の書記長を引き受けてくれとたのまれ、断りきれないので、たって引き受けて欲しいと

いう。そして、「支部は、ここしばらく、何もしていないので、支部の斗争資金はかなりあるし、あなたのやりたいようにやってくれてよい」という。

それで、支部長を引き受け、４月１０日に、地鉱教室の図書閲覧室で第一回支部委員会を開いた。

地鉱からは、私と今井さん、動物から徳田・三浦の両ベテラン。物理の加藤利三さんが若々しく印象的であった。当時は、支部長は選挙でなく、前任者から、次の支部長は誰々である、といわれて、それにみあったかたちで、各教室の分会から委員が出るのである。それで、書記局員はおろか、書記長もいない。４月１０日の第一回の支部委員会で、私は、新年度の支部活動方針をのべた。「今までは、教官側の支部委員を中心とした活動だったが、それをやめて、徹底的に組合員全体が参加した方針を決めてゆく、総路線方式とでもよぶような方式でゆきたい。時間はかかるが、組合を職員が自分のものにするように、理学部の職員の要求をとりあげ、全体討議にかけてやってゆくので、支部委員会が支部活動のなかでの役割は、今までより小さくなるかも知れない」といった話をし、加藤利三さんが賛成してくれた。

初仕事は特昇で、ときに１人で、ときに今井さんと２人で、事務長や係長と交渉しているうちに、事務室分と教室割当分を残して、教室割当分は、組合にまかせろという。妥協案を出してきた。人数のごまかしがあるので、人数比を実人数比にさせた。その上で、事務室の従来の配当の仕方を説明させると、就職のとき提出した履歴書を資料にしていること、履歴書の書き方を誘導して、本人が結果的に不利になっていることがわかった。加藤さん、今井さんら数人で、教室事務職の給与法を作り、客観的にみて特昇になるべき人の現号棒のリストを行政職の全体集会で公表し、公開討論を３～４回ほど行った。地球物理の年輩の技術者、「わたくしの特昇はよいから、若い人にまわして下さい。これからは、こんな不合理なことがおこならにようにして欲しい」という発言に、労働者はすごく感銘しました。

行政職の特昇リストを事務長に示し、職員の納得を得ているというと、黙ってうけとった。事務室内の特昇リストをみせるように要求すると、事務室職員の同意なしにみせられないという。教官の特昇問題は、加藤利三さんら教官の委員が中心になって資料づくりを行った。職階制、履歴が多様で、公開討論まで持ってゆけなかった。事務長は「教官の特昇は学部長が決めることで、私は決められない」という。それで、学部長室で友近部長と事務長同席で話し合いを行った。職階によって人数を割り当て、人名があげてあった。私は先方案の教授・助教授について、一部を削減して助手の方にまわすこと、教授・助教授リストの不平等を指摘して入れ替えること、一昨年特昇になった１人の助手の特昇を今年も行うことを主張した。２度目の交渉のとき友近部長が「この人は、組合員でないそうだが、組合員でない人を、どうして、そんなに優遇するのか」ときくので、「組合は、職員の生活や権利を守るもので、そのためには、組合員と非組合員との差別はしません。また、階層にこだわりません。教授で損のしている人に特昇をわりあてることに反対はしません。」というと、「君の主張はよくわかった。君の意見を入れよう」といって友近

部長とは、円満にきまった。ところが、事務長は、一昨年特昇の人を、今年特昇にすることに反対で、この１人のことで、部長とその助手の教室主任と３人で再度話し合って、こちらのいう通りにきまった。

これらの一連の交渉のため、事務室に出入りしているうちに、超勤費の配分の不明瞭なことに気がついた。係長の超勤が多いのである。

それで、事務長に、その点について質すと、「理学部は仕事量が多いので、事務員に負担をかけている」という。超勤簿をみせるように要求し、これでかなりはげしいやりとりをやった。加藤さん、今井さんもおったはずである。帳簿をみせない代わりに、事務室で費消している超勤費の半分を、教室の事務職員の超勤費にまわすという要求をのませた。それまでは、教室事務職員の超勤費はゼロだったのである。そして、このあと、用務員・技術職の人たちの履歴書再提出にもとづく、給与の号俸改正交渉にとりくんだのである。彼らが素直に応じたのは、"人事院提訴の男"で、何をやってくるのかわからないという、不気味な男と私を思っていたからである。これらの経済要求の闘いと前後して、文化活動として、映画上映会なども行った。物理学教室で、映画「荷車の歌」を上映した。映写技師は、当時、学生だった富田　克敏君。彼は、映写機を一度使った経験があるというので、かなり強引にひきこんでやってもらった。映写機は理学部のもので、事務室職員に有資格者がいたので、届けは、その人の名にした。

履歴書再提出による号俸是正という。思ってもみなかった幸運にわきたつ人たちをみていて、同じ職種の人たちの話し合いが大切なことに気がつき、支部委員会で、職種別の集合をもつことを提案し、強い支持を得た。

この職種別集合で、定員外職員の定員化は緊急課題として浮かび上がり、事務長や学部長と何度となく交渉をかさねた。

これら日常的な職員の要求をくみあげての交渉を行うと共に、全学いな全国的斗争になった安保条約反対運動に参加し、学部内での学習会、全学集会や街頭デモに参加し、支部から全学集会へのメッセージをよびかけたり、上京団に参加もした。

定員外職員の定員化は、全国的斗争と粘り強い交渉の結果、９月までに在職中の定員外職員の完全定員化をかちとった。そして、理学部で開始した、職種別集会を全学の支部長会議で紹介すると、浅井書記長提案で、職種別集会を全学的規模で行うようになった。

あけて、１９６１年に、理学部長選挙が行われるにあたり、三浦さんの提案が－ながい間、中止している組合推薦を再開してはどうかという－を支部委員会で決め、宮地伝三郎氏を推薦することにし、当選した。

６１年３月、支部の活動をまとめるにあたり、支部長のほか書記長をおくこと、支部ニュースを定期的に出すことを申し送りました。６０年の１年間、私が書刷のビラを刷って配布していました。

2)、１９６０年以降

冨田　克敏

１．６０年代；支部運動の新たな展開　＜組合員の要求を掘りおこして＞

１９６０年の日米安保条約改定反対の全国民的運動に理学部支部も参加して闘いましたが、５０年代後半から安保闘争まで、どちらかというと教員中心の活動であったともいえる状況でした。支部組合員の切実な要求を取り上げた活動としては、教室系事務職員へも超勤費の配分を、特昇を助手にも、といった要求運動を取り組みましたが中々進展しませんでした。

安保闘争で盛上がった力を更に持続的な支部の力にして組合員の要求を実現するために、要求を掘り起こし組合員の拡大と団結の力を強める運動を展開しました。映画会を開いたり、用務員・技能員（当時は傭人；その後の行２職員）や事務職員（当時は事務官約１０、雇員約３０；その後の行１職員）の要求を掘り起こし、組合員拡大を精力的に進めました。これらの要求の実現を学部長・事務長交渉で求め、ねばり強く闘いました。一方、組合員の要求に理解ある学部長をと、学部長選挙に組合推薦を行い６１年に初めて推薦教授が学部長に選出されました。この中で職員の給与格付けの改善、特昇の不公平改善、超勤費の教室への配分など着実に前進させてきました。

６０年代の前半は理工系拡充で物理、化学、数学教室の講座倍増が進み、教員、職員が増加し、これに伴い本部キャンパスにあった化学教室が北部に移転して来て理学部としてまとまったキャンパスとなりました。また定員法制定（1949 年）以来、臨時職員が増えてきていました。定員内職員の身分も年度進行で事務官、技官に移行していきます。このように６０年代前半は理学部としても一つの転換期であったわけです。

組合運動もこの様な情勢の変化にも対応して、組合員の要求を掘り起こし、組織を拡大して力を付け、理学部から行２職員の中央執行委員を送り出すなどして、要求を実現するまでになりました。その成果として、６１年には常勤的臨時職員の一斉定員化が実現し、特別昇級者について組合推薦を当局に考慮させ、職員の給与格付けでの不利益是正が進みました。

この間の京大職組としての大きな成果は女性職員が子育てをしながら働ける条件

づくりとして京大保育所を設立することが出来たことです。この保育所設立運動でも、支部組合員である中央役員を先頭に支部女性組合員の活躍が大きな力になったことはよく知られています。また老朽化した汚い生協北部食堂の改築運動が学生自治会、院生協議会と協同して進められ、1965 年にプレハブの新しい食堂が実現しました。

このような運動の中で、職員の若手を中心に組合員の拡大が進みました。京大職組としても組織拡大、運動の拡大が進み青年婦人部が婦人部と青年部に分離しましたが（1964)、それに伴い理学部支部に婦人部、北部キャンパス(理、農、基研など)に北部青年部が結成され活動の質とエネルギーの拡大をみました。

一方、沖縄・小笠原返還闘争、米軍のベトナム戦争介入反対闘争など国民的課題にも積極的に参加してきました。

60 年代の後半になると定員不補充（64 年）から、総定員法制定による第一次定員削減（69 年）が始まり、それを補う様に常勤的臨時職員が増えて来ました。これら臨時職員の待遇改善の運動が、まずボーナスの要求（64 年）から始まりました。そして６５年に常勤的臨時職員を日々雇用職員（定員外）とし、発令者を総長にして任用してほしいという運動に発展し、６６年にこれを実現しました。この運動でも理学部支部は先進的な役割を果たしました。

教員の待遇も劣悪で、全国の国立大学教官待遇改善懇談会が作られ京大世話人会が非組合員をも含めて活動しました。この運動の成果として助手に大学院手当が支給されることになりましたが、当初は差別的に支給する問題も起こり、助手部会がその改善を要求してたたかったのもこの頃です

1968 年から始まった「大学紛争」は 1969 年に京大でも学生部封鎖から始まり 4 月には理学部部長室の占拠と拡大し、組合運動も大きな影響を受けました。しかし、理学部支部は暴力的破壊的運動は問題の解決に有害であると毅然と対応しました。そして理学部の全構成員自治をめざして、協議会・教授会に働きかけ、学部自治懇談会を設けて学部改革について検討する場や、全構成員集会を開いて学部内の活発な討論を展開するなど、自主的大学改革を積極的に押し進めました。その結果、財界いいなりの化学教室７０周年記念事業の見直しや学部教育改革の推進に理学部支部は寄与して学部構成員の信頼を勝ち取ることができました。

２．７０年代；学部における組合の役割の増大＜全構成員自治を目指して＞

69 年から始まった「大学紛争」は 60 年代の急速な大学の拡大と大学に対する社会の要請に、旧態依然とした教授会自治が対応できずいたところに、「大学解体」のスローガンを掲げた暴力主義を背景とする学生運動によって引起されたのですが、これに対して、職組は国民のための大学づくりを原則に、全構成員の自治をめざして「大学紛争」を克服する運動を展開したのが７０年代の特徴でした。

理学部共闘会議と称する暴力学生集団の封鎖占拠戦術と、暴力による異なる意見の圧殺の暴挙に対しては堂々と批判の論陣を張って対応しました。また、暴力学生に同調した一部職員による「臨時職員闘争」なるものは、定員外職員の運動に一定の困難性をもたらしましたが、多くの定員外職員が職組支部に結集して闘い、この困難を克服することが出来ました。その間、物理第一教室でおきた定員外職員の解雇問題を粘り強い交渉・説得活動によって撤回させることができました。また、理学部内の定員外職員の待遇を定員並みにという運動も前進させました。また、定員外職員の定員化の運動は粘り強くすすめられ、７０年代前半で２名を定員化することが出来ました。一方、組合の組織強化では、理学部事務室に分会を確立して職員の組合への結集をつよめました。その中で、超勤費配分での中央事務と教室事務との格差是正、産休代替員の確保、宿直手当の増額、今出川通り（理学部正門前）の信号灯設置、テニスコートの設置等、組合員の切実な要求を実現させて来ました。

学部改革では、教員の職階による差別をなくす運動を助手部会が中心になってすすめ、助手の教育参加を正式に認めさせ、予算配分方式を職階性によらない方式に改めさせました。そして、助手の３等級（講師相当の給与）わたりを要求してたたかいました。また、全構成員自治を目指して、学部長選挙に定員外職員を含めた一般投票方式の改革を実現しました。

政府の定員削減に反対する運動を協議会・教授会と共にすすめ、協議会に増員要求委員会を設置して展開したこともこの期の特徴です。この間、理学部協議会は第２次定員削減反対声明を決議して、職組理学部支部とともに人事院、文部省などへの交渉団を結成し、バスによる交渉団上京を実現させています。

７０年代前半は、国民春闘として闘われる全国的労働者の賃上げ要求闘争を、公務員等の労働基本権（スト権）回復を目指す闘いと結合して、活発に展開したのが特徴です。京大職組もこの春闘に参加して、時限スト、半日スト、１日スト等で積極的に闘い、理学部支部では、毎回１００名を超える参加者で盛上がりました。春

闘・スト権ストはその後の弾圧と民間労組の労使強調路線が強まる中で後退し、７０年代後半には、戦術転換を強いられたのです。

７０年代の後半は、７３年のオイルショック（第一次）と、列島改造開発ブームで引起されたインフレによる生活危機が進行する中で始まりました。また、アメリカではベトナム侵略失敗を契機に経済的基礎力の弱体化が露呈して来ました。これを克服するためにアメリカは日本へ貿易自由化の要求を強め、日米経済摩擦が強まりました。このような米国の強硬な対日要求を受け入れる一方で、日本独占資本の力を保持するために経済構造転換の動きがはじまったときでもありました。この構造転換の柱は、労使一体化によって危機克服するという労資協調路線のもとでの労働戦線の再編、と技術立国を目指す技術革新・省エネルギーの確立、低賃金を求めての海外進出にありました。従って、春闘も経営者ペースで終結することが多く、戦闘的な労働組合運動には分裂懐柔の激しい攻撃受けて後退を余儀なくされたのです。この様な情勢のもとでの労働運動の再構築をめざして、国民春闘の闘い方のみなおしの動きが、全国的に始まりました。京大職組でも仕事をみつめる運動、職場総点検運動などが開始され、理支部でも教研集会がひらかれます。ここでは、女性差別の昇格問題、定員削減の中での仕事の問題、定員外職員の定員化への道等が議論されました。ここから、行政職懇談会を設置させることなどの新しい動きが見られました。

教職員の働く条件の改善は、この間、少しずつですがすすみ、育児休業法の制定（７５年）、週休２日制への試行、定員外職員の頭打ちの解消（文人給１０９）等が獲得されました。

「大学紛争」から始まった７０年代後半の大学の研究教育をめぐる状況は、教官等積算校費の据え置き、定員削減、産学協同の推進の動き等によって、大きく動き出していました。これらの状況をより正確に組合員をはじめとした教職員に伝え討論を活発化する目的で理支部教員部会は「理学部評論」を発行し定期刊行を目指して活発に動きました。

７０年代後半のもう一つの特徴は、全国に広がっていた革新自治体が次々と崩れ、京都の革新府政は７８年４月に幕を閉じたことです。

３．８０年代；大学への逆風と労働戦線の右傾化の中で

７０年代に全構成員自治へ向けての学部改革は一定の前進を見ることができまし

た。それは、教育改革、学部長選挙制度の改革、増員要求委員会の設置、予算配分方式の改善、学部自治懇談会や行政職懇談会の設置等でした。

７０年代の全構成員自治への改革は、政府・文部省によって、法律に反するとみなされて、大学に圧力が加えられるようになりました。とくに学部長選挙の方法で、教授会メンバー以外の関与は、せいぜい教員までで、職員や院生・学生の関与を認めないという圧力でした。理学部にも強い圧力が加わり、それに応える教授会・協議会の方針転換で、ついに 1983 年 2 月に職員の学部長選挙への関与を取り除く選挙規程に改悪されてしまいました。この間、理学部支部は、学部自治推進委員会を設けて選挙規程改悪反対の運動を粘り強くすすめましたが、改悪を阻止できませんでした。しかし、この運動のなかで、学部自治への参加を引き続き求める運動を継続することが組合員の間で確認され、その具体的方法として、学部長選挙における職員の自主投票での意見表明方式を案出して、対応することになりました。この方式は現在も続けられ、選挙権をもつ教員の中に参考意見として影響力を持っています。

一方政府は、臨調行革路線をすすめ、定員削減と教官等積算校費の据置き政策を、大学に押し付けて来ました。その結果、あらゆる部署に、パート職員なしでは研究教育が出来なくなりました。そのことは、大学予算を硬直させて、校費据置に輪をかけた結果、大学を益々疲弊させたのです。教職員の仕事量は日に日に増大し、ついに、教員の過労死を招きました。職組理学部支部は、この事を重視して、公務災害認定のための運動をすすめ、ついに当局に公務災害として認定させました。理学部支部は犠牲者を再び出さないために、仕事の点検・見直しをすすめ、教研集会をたびたび開き、事務機構や職員の待遇改善を具体的に検討して、要求運動を展開しました。要求運動の具体的内容は、85 年定年制施行に伴う空きポストを利用した定員外職員の定員化、職員の３級高位号俸者を高位等級へ措置させるための主任定数の活用、女性差別を止めさせる行政措置申請、教室と学部事務の人事交流、助手定数の講師振り替え、教員給与に教育研究調整額の新設、構内の交通安全・環境整備等でした。この中で、事務職員の主任定数の高位号俸者への配当を実現し、職員の要求にもとづく人事交流の実現、構内道路に歩行者専用道路の設置など前進させました。しかし、定員外職員の定員化は、語学試験による全学的採用で理学部では一名採用されたのみで問題解決には程遠い結果となりました。その外の要求も、行革の厚い壁で実現されませんでした。

労働運動の右傾化のもとで、春闘は連敗を重ね、公務員賃金も人勧凍結や低額勧

告で終始しました。一方では消費税の導入等国民の負担増で教職員の生活条件も悪化し続け、不満は沈積したままでした。

さらに、社会の要請に応えると称して、政府文部省主導の「大学改革」がすすみ、入試改革、大学審議会の設置などで、大学の自主的改革が圧殺されてきたのも８０年代の特徴です。この様な状況で、教員は研究教育の推進のため、科研費の申請に精力を費やし、外部資金の導入・文部省の財政誘導策にすりよるなどの動きが顕著になりました。その結果、学部内に研究費等で貧富の差が増大し、無力感や意識の差さを生み出し、一体感の希薄さが生まれてしまいました。

４．９０年代；「大学改革」の嵐の中で：＜若い力の結集をめざして＞

政府が 80 年代にすすめた大学いじめは、大学を極度に疲弊させました。大学の惨状はマスコミにもとりあげられるようになりました。理学部も取材を受けてその疲弊ぶりが、雑誌等で紹介されて、国民も注視することとなり、財界も危機感をもつに至りました。そこで政府は大学の建物や基本設備に公共投資枠を若干ふりむけてきました。理学部でも動・植物学教室の建て替えが実行され、他の教室の増講座分の面積を加えた理学２号館として完成しました（１９９５年３月)。それでも、理学部全体の建物の老朽化と狭隘さの解消にはほど遠い状態です。

「大学改革」の方策は大学審議会によって着々と決められ、文部省は積極的にそれを実施してきました。大学設置基準の大綱化・弾力化、教養課程の廃止、大学院重点化、産学協同の推進、教員の任期制の導入などです。理学部もご多分にもれずこの「大学改革」の渦に巻き込まれ、てんやわんやの状態になりました。教養部の廃止にともなうカリキュラム改革などで、キャンパスに学生が溢れ、大学院重点化（９４年３月～９５年３月）のスタートで大学院生が急増するなどで、教職員に過重な負担を強いる状態が生まれました。

教職員の労働条件は、完全週休２日制の実施や、教務職員の助手への振り替え、事務職員の主任定数増などの改善は見られたものの、不払い超勤（サービス残業）の増加、勤勉手当の差別支給など悪化がすすみました。

理学部支部は、「大学改革」による職場の新たの問題を、明確にするために職場（分会）めぐりや学習会、組合員交流会などを通じて掘り起こしてきました。この中で、定員削減をパート職員の増加で補うには既に限界にきていて、教育研究支援体制は殆ど機能麻痺に陥っている状況のもとで、業務の簡素化、機能化が職員の当面の要

求にもなっていることが明らかになりました。また、パート職員の要求は、最初、せめて大学職員として職員録への掲載でありましたが（９６年度実現)、今や研究支援体制の重要な一翼を担うまでに増加し、長期化した現在、劣悪な待遇の改善を強く求めています。とりわけボーナス支給の要求は切実です。これらの要求実現をめざして、具体案を提示しながら学部当局に交渉してきましたが、制度の壁にはばまれる一方で、学部内の大方のコンセサンスがえられず改善が進んでいません。

教員も世代交代が進み、若手教員が増えている状況のもとで、組合員の拡大運動を積極的に進めました。その結果、多くの若手の教員組合員をむかえることができました。その結果、９５年度から支部書記長は若手教員が担うなど支部に新風をもたらしました。さらに、事務体制検討委員会、データバンク委員会を置いて政策作りや、情報収集分析活動を充実させてきました。また、機関紙「いちょう」を学部内情報紙にしようと紙面刷新をはかって、“見える組合活動”を目指す新しい試みが進められてきました。これらの活動を活発にするうえで、新しい２号館に支部ボックスが移転できた（９５年３月）事もよい効果を挙げたのかもしれません。

この時期の若手教員組合員の活動で特質されるのは、教員任期制反対の運動です。インターネットやホームページを活用した学部内、学内そして全国的連絡網を確立し、これを武器にした運動は、威力を発揮しました。しかも、任期制について、根底から検討しての反対運動は説得力をもったものでした。結果は、法案が国会を通過して成立しましたが理学部に今後任期制を導入させない理論的根拠と実績を作る事が出来ました。

９０年代の理学部支部の活動は、これからの５０年に向けての支部活動の基礎を模索し、その基礎を築く鍵を探し得た貴重な活動であったと、纏めるのは言い過ぎでしょうか。課題は山積しています。そして、それを解決するには、厳しい壁が横たわってはいます。しかし、新しい力が、必ず乗り越えるであろうという確信をもつ事が出来る９０年代だったと思います。これからの理学支部のあゆみが、組合員の生活と権利を守って着実に前進し、過半数の教職員を組合の隊列に迎える輝かしいもであるように、心から期待したいと思います。

3，歩みのあとを振り返って

理学部支部役員をした頃の思い出

1964年度、65年度書記長（物理分会）　永田　忍

３０年以上も昔の記憶がどんなにあいまいなものかということを思いしらされています。それでも確かに覚えているのは、私が支部書記長に選ばれた１９６４年の頃は、米ソ冷戦の激化のさなか、日本の進路を左右する課題をめぐって、全国民を巻き込んだ大きな運動が展開されていたということです。６０年日米安保闘争に引き続いて、米原子力潜水鑑寄港反対運動があり、６４年夏には第１０回原水爆禁止世界大会が京都で開かれ、また６４年北京科学シンポジウムが中国で開かれました。私はそのいずれの運動にも深く関わっていて、自分の青春ーといっても３０歳をこえていましたがーを打ち込んでいました。このため、書記長の役割を充分果たせず自分自身の納得のゆかなさから、次の期も書記長を進んで引き受けたように思います。

この頃の活動の柱は、（１）生活と権利を守る運動、（２）平和を守る運動、（３）組織拡大でした。６４年度の（１）の活動は盛んで、賃金問題、欠員補充問題、婦人部結成、臨職問題、生協問題、保育所設置と実に多彩で組合の活発さが感じとられます。しかもそれぞれに具体的成果を得たり、新たな局面を切り開くような活動が展開されています。私も交渉などには参加したと思いますが、ほとんど記憶がありません。今辛うじて覚えているのは、組合のリクリエーションでビール工場見学に行ったという楽しいことです。

当時、理学部支部は執行部の請負になっているとか、教官組合といわれる問題をかかえていました。その克服のためにも、（３）の活動では”行政職の強化”が重点課題でした。この時期特に青年・婦人への働きかけを強め、数理解析研究所にも声をかけたりして、その後「北部構内青年交流会」という活動（６６年）への足掛かりができたように思います。若い皆さんと遊んだり議論をしたり、やはり楽しい思い出が浮かびます。それらの方々が今、組合や各方面での活動を担っておられるのではないでしょうか？

今から見て驚くのは、支部の組合員の新規拡大が６４年度に３７名（教官１０、行政職２７）、６５年度に４６名と記されていることです。この時期、上に述べたような全国的な平和と民主主義運動の高揚の中にあって、組合でも運動の課題や方向が明確にされ、職場の要求をとりあげ、それにこたえていたことが、組合員獲得にも反映したのだと思います。何よりも、組合員が生き生きと活動していたのが魅力的だったのではないでしょうか？

そして私も院生から組合に入って間もない頃で、今考えてると、この時期に始めて組合を理解し、組合員として成長したのだと思います。

なおこの組織活動のなかで、支部の規約がないとなったのでしょうか、６５年度末に規約（案）を提案しています。富田克敏さんの話では、投票率１００％に頑張ったということですが、残念ながら私の記憶はありません。

理学部支部の活動　－　想いだすこと

1975年度支部長(地鉱分会)　志岐　常正

１９６２年、組合員になって２年目の支部書記長の仕事が、記憶に残る組合活動のはじめです。当時組合の力は大変弱かったのですが、理学部だけについて見れば、組織率は現在より高かったかも知れません。

当時の組合は、弱い反面、今より”おおらか”だったような気もします。想いだすことと言えば、松下と宝酒造の工場見学に行ったことぐらいです。工場労働の実態を知ることもさることながら、本音はビールを飲ませて貰うことが
大方の目的だったに違いありません。

今と違うのは、昔は特別昇給についての取り組みが、一年の活動の中で大きな位置を占めていたことです。芦田学部長のときなどは、特昇の扱いについては、その考え方だけでなく具体的割り当て（人名）に関してまで、学部長が組合の主張をなるほどと思われると、”そうしなさい”と事務長に指示されたものです。

芦田学部長といえば、組合の支部長ほかの案内で職場視察をされた、これまでただ一人の学部長ではなかったかと思います。たしか先生が２回目の学部長のときでした。事務長がずいぶん気にして可笑しかったのを覚えています。今なら、要求や不満をいっぱいぶつけることになるに違いありませんが、当時は定員削減や仕事の偏りなどの問題も深刻化していなかたようで、宿題を学部長にだす機会としては、あまり生かせませんでした。職場の実状視察は、その後も加藤学部長、溝畑学部長などのときにも計画しましたが、たしか実現しなかったように思います。その頃には、大勢集まっての団体交渉が定着していたからかも知れません。

１９７５年に支部長をしたときは、実は日本科学者会議京都支部の事務局長というのをしていました。支部委員会を欠席したりして、ずいぶん書記長の池内さんに迷惑をかけました。池内さんと言うのは、宇宙の研究で優れた業績を挙げられ、科学の普及の面でも活躍しておられる、あの池内了さんです。そんなに偉くなる人とは知らず、なんでも仕事を押しつけて、今恐縮しています。それにしても組合活動家としてもたいへん優秀でした。

ところで、最近のことは知りませんが、理学部支部の特徴は、古い言葉で言えば"独立愚連隊"であることでした。日本教職員組合や京大職員組合が何をしていようがあまり関係なく、職場と支部の実状に応じて好きなことをやっていたということです。支部にいるとあまりそのことに気付きませんが、京大職組の書記局員や委員長になると、それが見えて苦笑させられたものです。もちろんこの傾向が悪いという意味ではありません。今後も、職場に根ざした活動を基本にすえていかねばいけないでしょう。それとともに、問題を日本や世界の人々とともに考えていくことが、明るい展望を得るために、これからますます大事なのではないかと感じています。

学部当局と組合支部

1983年度支部長(植生分会)　冨田　三朗

支部活動の思い出は数え切れない程あるが、幾つか絞って振り返ることにした。

一・・・には１９６９年の大学紛争当時の暴力学生の入試反対行動の時、芦田学部長は「全構成員集会」を開いて、学生、教職員全員による討論の場をもたれた。この時、このような多数の学生による妨害を阻止できるのは職員組合しかない、組合のように常に多くの組合員が一致団結して実績をあげている、このような組合の役員が中心になった入試実行委員会をつくってはどうかと会場からの提案があり全員の賛成で決定した。実行委員長には前学部長、富田和久教授、副委員長には田中正助教授、他の教室からもほとんどが組合員の教官だったが、行政職では故人の田中耕三郎、冨田三朗が任命された。

二・・・には定員削減に反対する機関の一環として学部当局が設立した、増員要求検討委員会のメンバーに学部長、評議員、事務長のほかに組合から行政職の今井敏子、冨田三朗が加わった。このようなことは、他学部ではまづないことである。理学部には革新的な教官が多いこともあるが、それ以上に職員組合の常々の運動が評価されていたからである。

三・・・には京大職組賃専部の考えによって宇宙物理の母袋久さんの定員外職員からの定員化に６等級－６号（現３級－６号）での採用を勝ち取ったこと、当時文部省の採用規定では８等級－７等級は人事院の試験採用等級のため定員化する場合は人事院の承認がいる、５等級以上は昇任等級となっていた。ので文部省の承認が必要であった、したがって６等級だけは各大学の級別定数の範囲で事由に昇格をさせていた。この制度を利用して６等級に空ができた時、先に定員化に使ってしまう、この制度は大学当局も他の大学の組合もしらなかった、この制度を利用したのは京大が全国第一号であった。この事を一時期は文部省自ら京大方式という、表現をし

たものである。

四・・・には前田豊三さんの研究者としての条件をそのまま生かしての「状況経過書」によって「公務災害」が認定されたことである。普通公務災害は上司の命令により過酷な労働を強いられての「過労死」を認定の対象にしている。ワーキング・グループが一番困ったのは研究者は上司の命令を受けて研究をしているのではない、ここをはっきりしておかないと、他の研究者に影響がでる、この事が事務当局、文部省、人事院との接点を見いだすのに苦労があった。この形式での認定は全国第一号であった。認定されるまでの幾つかの問題点を一つ一つ整理され、ワーキング・グループのほとんどが組合の役職経験者だったのでこの困難な認定が勝ち取られた。その後、ワーキング・グループの発行された冊子『ある研究者の過労死とその公務災害認定までの取り組み』を読んだ、名古屋大学教授の過労死の申請中である故人の弟さんが、私の退職後でしたから我が家に尋ねてこられて、上司の命令のところで行きづまっているので教えてほしいというもの、ワーキング・グループの堅実な取り組みを紹介して、一般労働者と研究者との違いを説明をしたことがある。その後２年位して、おかげ様で「認定されました」ありがとうございましたという礼状が来たことがある。

理学部支部50年と教員の任期制

1993･1969年度支部長（物理分会）　加藤　利三

職組理学部支部５０年のうち、私は３９年間組合員として過ごした。昭和３２年ＭＣを修了して７月に就職した時、直ちに組合にはいった。一部の教授層を除き、多くの人が組合員だったと思う。組合に入ることにそんなに抵抗がなかった。組合に入ってすぐに支部委員になり、当時ベテランだった地鉱教室の中山　勇さんから組合活動のイロハを教わった。超勤費の教室職員への支給問題で、当時の事務長と厳しい交渉をやり、学部事務室職員の１／２が支給されるようになった。それまではゼロであった。引き続き　安保の闘い、大管法の闘い、超勉手当の差別支給反対の闘いと続き、はじめて時間内ストが決行された。この中で、私は故川口　是　元委員長から、大学の財政問題の重要性を教わり、予算配分の仕組みを勉強した。大学本部留保金や、文部省の特別予算などが、本部や学部長などのさじ加減で処理されることが多いことを知り」、財政公開の運動を組合あげて取り組んだ。理学部の財政が大学紛争を契機に大幅に民主化された。予算配分のルールもこのときにできた。大学紛争は大学の在り方をめぐる深刻な闘いであった。それまではどちらかといえば、外や上にむかっての闘いであったが、これは内と外へ向かっての両面の闘いであり、大学の在り

方という、きわめて今日的な問題（大学の使命と教員の任期制）でもあった。

もうひとつ、私にとって忘れることのできないのは、昭和４０年京大保育所が組合の力によって作られたことである。一乗寺の一角、坂東さん宅ではじめられた小さな共同保育所が、京大の組合に受けとめられ、それまでの運動と一体となって、西部構内の片隅に「朱い実保育園」として実を結んだ。婦人部の方々や非組合員の方々など、実に多くの協力があり、ついに大学当局を動かした。

約４０年の組合員の間で、前半は組合の高揚期であったが、後半は政治や労働運動全体がそうであったように、政府や財界の反撃に押されて厳しい状況であった。相次ぐ定員削減で閉鎖される職場や定員外職員が増えた。学部といっしょに増員要求委員会をつくり文部省へ陳情にいったりしたが、壁はあつかった。昨今の厳しさは度を超しており、まさに危機的状況である。そこえもってきて今度は「教員の任期制の法制化」が持ち込まれようとしている。大学自治の根幹である教員の人事権を根こそぎ覆そうということである。

世の中は「行政改革」や「財政再建」ということで官庁減らしや、リストラの大合唱である。民間企業でも不景気ということで厳しいリストラが行われており、派遣労働者やパート職員が増え、雇用が流動化しつつある。このような状況の中で、大学教員だけが「教育公務員特例法」により特権的に守られていることに国民は違和感を抱いているのかもしれない。しかし、「任期制の法制化」が大学教員だけにとどまらず、（公務員）労働者全体への適用の突破口となる可能性があり、さらには、国の将来にとって大変なことになるのだということを国民にも理解してもらわないと、これを阻止することは難しい。

私は昨年３月定年で退職したので、一定の距離をおいて大学を見ることができるようになった。このような眼で昨今の出来事をみると、「もんじゅの事故」や「エイズ薬害」等々、国民の科学者に対する不信が強まっているのをひしひしと感ずる。関係企業や官公庁の研究者が、これらの問題について良心に基づいて発言することを期待できないのは、今までの例から明らかである。首が危ないからである。まがりなりにも学問の自由と身分が保障されている大学人が、学問と良心に基づいてもっと発言してもよいのではないかと思う。また若手の科学者が簡単に「オウム真理教」へ入信したりしているのをみるとき、「大学ではどんな教育をやっているのか」と国民から疑問に思われても仕方がないと感ずる。

勿論大学が自主的に改革に取り組み、様々な局面で真摯な努力をしているのを知っているが、国民には見えない。むしろ、多くの大学人や科学者が、政府や財界のいろいろな審議会や諮問機関に加わり、政策立案や査定に協力しているのが目立つから、（あまりいい政策でない場合が多いか

ら）大学も大学人も全体としてはあまり信用されていないのではないだろうか。いま国民が大学と大学人に求めているのは、個々の学問の成果（財界はこれを熱望している）もさることながら、それに加えて「もんじゅ事故」や「エイズ薬害」等々の問題にたいして、“学問と良心に基づいた批判的発言や、簡単に「オウム」などへ入信したりしない、あるいは、偉くなったときに汚職に走らないような批判精神をもった学生を教育してほしい”ということではないだろうか。これを実行しようとすると、大学人や科学者は、必然的に既成の学問体系や権威、あるいは時の権力と一定の緊張関係をもつことになるだろう。このことを怖れては真の意味での大学の使命を果たすことはできない。任期制が「法制化」されたら、上に述べたような国民の期待に応えることがやりやすくなるだろうか。本当に大学が活性化するだろうか。“学問や教育”は法律により強制されて発展するものだろうか。

このような視点からの議論も国民の理解を得るのには必要ではないだろうか。今、大学が“本来の意味での大学”として生き残れるかどうか危急存亡のときである。理学部支部が５０年の歴史の幕を閉じないよう頑張っていただきたい。私もOBの一人として加勢したいと思っている。

長くなったついでに余談ながらもう一言付け加えたい。
１９９３年度のことだったと思うが、物理第一教室からの支部委員だった佐々真一さんが、教員にたいして「何故、組合に入ったか」、「組合に何を期待するのか」等のアンケートをおこなった。私はこれに余り明確に答えられなかった。翌年度支部長をやったとき、支部としてこれを引継ぎまとめたいと考えていたが果たせなかった。４０年前、組合に加入したときは、“組合に入るのがあたりまえ”みたいな時代だったから抵抗感なく加入した。今の時期に、新たに組合に加入するとしたら何と答えるかと考えて戸惑った。教員の立場から組合に期待することは仲々実現が難しい（行政職員にとってもそうであるが）。それでもやはり組合にはいっただろう。一人一人の力は小さいが、多くの人々と力を合わせることにより要求を一つ一つ実現し、国の政治を変えていく以外に方法がないからである。自分の才能や力で何かやれるかもしれないと思うのはやはり教員の思い上がりだろう。そのようにして多くの大学人や科学者が誘惑に嵌まり込んでいくのであろう。心すべきことである。強いていえば自分の生き方と重ねあわせて「組合にはいる」と答えるだろう。

思い出

1973年度書記次長（地球分会）　池田ひろ子

理学部で組合に深く関わっていたのは２０才からの数年間だけで、この記念誌に稿を寄せるのは、とてもとてもレベルとラベルがちがう思いです。が、若き迷える時代の一組合員として、印象に残っている出来事を思いつくままに書いてみました。

理学部に就職した当時は、構内の庭木に勤務評定（勤勉手当に差をつける）反対の短冊があちこちに吊り下げられていました。そんな組合へ最初は、青年部に誘われて合宿や集会などウロウロとついていくうちに、いつのまにか北部ブロックでは男性青年部員をリードする、強い女５人組の１人という事になっていました。当時、青年部では沖縄返還運動に取り組んでいて、理学部の学生自治会とも共闘という形で北部生協前で集会を持ったりしました。また休日には、歩行者天国になっていた平安神宮前を女性陣何人かで、風船を持ちゼッケンをつけて、署名をして下さいと言ったか、ビラをまいたか定かでないのですがウロウロと歩いていました．．．．．ら、「ここでは．．．．しないで下さい」とマイクで注意された事もありました、私としては強い問題意識を持ってたようにありませんが、やっていた行動は大胆だったようです。後になって沖縄が返還され、要求課題が実現しました。あの時やっていた事は正しかったんだと実感しましたが、まさかホントになるとは思いませんでした。

また、超勤費の教室内での配分をめぐって問題になった時、地球物理の教室会議で議論の席上、当時事務室のＫさんに個人・組合攻撃をされ、激昂して思わず涙してしまったこともあります。この時は少々泥試合のおもむきがありまして、私は熱血の輩になっていたようですが．．．。また大学紛争から数年は、教室の建物の周囲をピッピッと笛の音がし、棒の先に赤い布をつけたヘルメットの集団がデモ行進する環境の中で、学部の全構成員集会が何回も何回も、昼も夜も遅くまで討論・議論がされました。その当時、書記長されていた益川さんや、和田さんなどの順序をふんだ、かみしめた発言が印象に残っています。

支部委員や支部の書記次長をしていた時、１９６０～７０年代頃の旧宇宙物理の地下にあった、狭くて寒い支部ボックスで、それまでの「支部ニュース」から「いちょう」になった機関紙（職場新聞）の印刷をしていて、輪転機の黒インクが、お気に入りのスプリングコートについてダメしてしまった残念な思いもあります。「あ－私が何でこんな事（印刷する役）せんなんのか。してなかったら汚れたりしなかったのに」などと．．．。

など振り返ってみますと、あふれんばかりの情熱と、けなげな活動をよくやったなあ－と、自分ながら関心してしまいます。今は何もしていない証拠かな。燃えもしたけど途中で放り出したこともあったし、挫折もした。

体力的にも精神的にも不充分な青春時代、よく悩みけんかをした青春時代の１ページに理学部支部での組合活動があったように思います。

主任問題、ベトナム解放、そして告白

1975年度書記長（物理分会）　池内　了

今から思えば、私が理学部支部の書記長であった時代は、人生で最も忙しかった時代であった。子供が生まれて保育所運動をしなければならず、博士論文をまとめつつ、書記長まで務めたのだから。しかし、その間にどれほど沢山の人と知り合えただろう。そして、私たちの給料の仕組みや大学財政など多くのことを学んだ。それらは今でも私の貴重な財産になっている。

私たち（支部長は志岐さん）が取り組んだ課題は、教室に勤める女性職員の主任発令問題（いわゆる平５）、そして定員外職員の産後８週間の休暇問題であった。前者は、全学的課題で総長交渉に何度もでかけ、結局理学部で３名の高号俸の女性に対する主任発令があった。もっと多くの発令があるものと考えていた私は理学部の総会で謝ったのだが、富田さんが「いや池内さん、初めてでこれだけ獲得できたのだから大成功ですよ」と言って下さった。後者は、保険による産後６週間の休暇にプラス２週間分を理学部が負担せよという要求で、当時の溝畑理学部長と数回交渉した。溝畑さんは、よく私たちの話を聞いて下さる部長で、最後にはこの要求も実現した。このとき私は、（鬼の？いや、花の）婦人部の集まりで妊娠出産の医学について勉強されられたのを覚えている。

実は、最も印象に残っているのは、１９７５年４月３０日ベトナムが完全に解放されたニュースを聞き、深夜に「祝ベトナム解放」の旗を作ってメーデーに駆けつけたことだった。世界も日本も夜明けが近いという雰囲気が満ちていたような時代だった。それは幻想だったのだけれど、そのような時代の組合運動だから、私でも書記長が務まったのだろう。研究者として一人前になれるかどうか悩みながら、宇宙物理学教室の地下にあった理学部支部の暗い部屋を何度訪れたことだろうか。

最後に一つ告白しなければならないことがある。私の恩師の林忠四郎教授が組合推薦で理学部長に選出されたのだが（このため研究室で大いに嫌みを言われた）、組合交渉の前には必ず林先生に呼ばれ、組合が何をどこまで要求しているのかを問い糾された。私は、組合の要求の真意はここまでで、先生はこう答えるのがいいと伝えていた。一方、交渉前の組合の下相談では、林部長はこう考えているようだという情報を伝えた。まさに、二重スパイとして働いたことである。林先生は政治的な人ではないから、かえって過激になったり、思わぬ食い違いが生じて組合と決裂してはいけ

ないと思い、私はこの二重スパイの役を務めたのだった。もう２０年も前のことだから、時効になっていると考えここに告白することにした。

定年後5年雑感

1978年度支部長(物理分会)　田中　正

早いもので皆さんに暖かく送り出していただいて、もう五年が経とうとしています。今頃は銀杏並木が美しいだろうなどと、懐かしんでいます。

今回理学部支部創立５０周年記念冊子の執筆依頼を頂きましたが、生来物覚えが悪いのと、もうひとつわが古巣の現状が掴めない不安があって、期日から大幅に遅れてしまいました。

頂いた資料によると、私たちが支部役員をしたのが１９７８年度、もう２０年近くも前ということになります。それからさらに遡って（１０年ほど？）、今では考えられないような職組本部の最後の「非専従の書記長」（委員長がもう亡くなられた文学部の重沢俊郎先生というコンビ）という「大役」をすませた後だったので、すっかり安心していたところに、連続２期務められた今井敏子支部長（地鉱）から、次期支部長をやれと言われてショックをうけたのを覚えています。”林（忠四郎）学部長は「物理教室出身」だから、教室で面倒を見なさい。”というのが主な「推薦理由」だったようです。送って頂いた当時の「活動資料」を眺めて、その一年がほとんど「定員外職員の定員化」の活動にあてられながら、なにも「成果」がなかったことを見て、あらためて暗い気分に陥りそうです。

しかしそれをなんとか支えてくれたのは、大勢の人々との楽しいつきあいであったと思います。毎週定例の「書記局会議」は、夕食後にはじまって１０時、１１時、宿直の用務員さんに迷惑をかけながら、深夜におよびました。場所はもうなくなった旧宇物教室のきたない地下室。うす暗い電灯のもとで机を囲んだ常連は、なにが起きても一向に動じない書記長の関（一）さん、いつも要領よく柔軟に場をもりあげてくれる副支部長の西村（敬一）さん、そしてまさに”はきだめにツル”といった感じの竹村（協子）さん（書記次長）でした。それに比べて、昼休み時間にあわただしく開かれる支部委員会は、報告ばかりが多く、集まりもあまりよくなかったように記憶します。

さて話しを現在にもどして、いま一番気になるのが、かつての「大学紛争」以来火だねを抱えてきた「大学改革」です。それはいま最悪のかたちで進行しているように見えます。「教員の業績評価」や「任期制度」にしても、日本の現状でこのまま進めば、先日来の「政治改革」の茶番劇では済まない、取り返しのつかない大学の荒廃が出現すると思います。その時もっとも犠牲になるのは助手層でしょう。でも少なくとも当局の表向きの

たてまえは、大学への「規制」を減らすということらしいので、大学が本当にやる気があればいまはチャンスでもあるはずです。「助手・教官部会」の活動を期待します。

京都大学職員組合理学部支部とその後のこと

1979年度支部長(植物分会)　岩槻　邦男

理学部支部創立５０周年記念冊子ができるということで、歴代四役の一人に数えられる私にも原稿を書くようにとの指示がまいりました。１９７０年代のことですから、大分記憶も薄れておりますが、改めて当時の記録を掘り起こしたりする余裕が無いままに、記憶だけで責任を果たさせていただきます。

１９８１年から併任の立場で関与するようになった東京大学植物園に、１９８３年から専任として移動してからは、園長という管理職を続けることになりましたので、東京大学では職員組合には所属はしませんでした。もっとも、技官の組織化をはじめ、職員問題には深くコミットしましたので、東京大学でも職員組合に所属する人達との話し合いは度々やりました。植物園長や評議員で、管理職側におりはしましたが、基本的なものの見方には、京大時代と変化があったとは思いません。京大の頃、文部省を敵視するようでは大学はよくならないのではないかといっていましたが、文部省と一緒に、財政当局との折衝や人員確保のための行動を展開しなければ、大学の発展はあり得ないという現実は、管理職の１人として動いていて一層強く感じることでした。

私が理学部支部長を引き受けていた頃の大切な問題の一つに、常勤的な定員外職員の定員化という課題がありました。職員の定員に余裕ができたときの採用の問題でしたが、いろいろの障壁はあったものの、全体として雇用関係をよくしようという姿勢はずっと続いていたといえると思いますし、大学内にそのことをめぐってそれほどの不信感が引き起こされることもありませんでした。それよりも、定員削減のあおりで、新規採用枠がほとんどなくなってしまったことの方がよほど深刻です。東京大学の在任していた間にも、植物園の技官の減数に振り回されたり、定常的な空きポストでなんとか消化できていた教官の定削の数が、とうとうそれでは破綻を来すようになって、教室施設が具体的な数字の負担を強いられているようになった時期にちょうど評議員で、学部長を補佐して教室側との話を、園長としての自分もその立場では困るといいながら、詰めなければならなかった時などには、職員の定員化を一途に追究していたときの方が気楽だったと思い出したりしたことでした。もっとも、今では、その管理的な業務からも開放され、立教大学で、初心に戻って植物学にできるだけ時間が割

けるような日々を送っております。
大学がいろんな意味で姿を変えつつありますし、研究活動の在り方も変化しつつあります。いたずらに保守的志向にこだわるのではなくて、変化をよりよいものにするために何が必要か、管理者側の責任も重要ですが、職員としても建設的な思考と提議ができるようでありたいものです。職員組合の健全な発展を期待いたします。

好きやったなあ、あの顔、あの支部長

1980年度書記次長(物理分会)　春日井　昇

理学部支部創立５０周年記念小冊子を発行される由、案内を頂いて始めて、そうか、５０周年なのかと知りました。
近頃、組合の事を振り返る精神的ゆとりもないまま、ただ漠然と日々を過ごしておりましたが、原稿依頼が来て、突如、何とも言い難い思いが私の心を襲いました。そうだ、私は支部四役だったのだ。記念すべき５０年のうちのどこかの１年間、支部の皆様方と共に精一杯組合活動をがんばったのだ・・・。そうしたらどうでしょう。断片的にではありますが、当時の事がポツリ、ポツリと目に浮かんで来るではありませんか。そう、私が担当したのは今から１５年以上も前の１９８０年度（１９８０年６月～１９８１年６月）、大学の自治、学部の自治がある種の危機に直面した真っ直中でした。学部の自治を語る上で、最も象徴的な事柄は、学部長選挙であろうと思われますが、１９８１年２月に行われた学部長選挙は一般投票が全構成員で行われた最後の選挙であった様に記憶しております。この時は、ただただ選挙が我々の手で行えたという喜びでいっぱいでした。ある面では、学部の自治を死守出来たと言えるかもしれません。
選挙に先だって、学部長候補の諸先生方に支部四役としてインタビュー出来ました。中でも特に印象深かったのは、山口昌哉先生でありました。大学は学問の自由とそれを保障するための自治を生命とする基本認識に賛同されるところから始まる「開かれた大学とは」と言う先生の書かれた小論文は研究一辺倒ではない先生の人柄を見た思いがし、多いに勇気付けられました。勿論、私が先生を推薦したのは言うまでもありませんが、結果として組合の推薦も得られ、１９８１年４月、山口昌哉学部長が誕生したのでした。
それから、理学部長（前任の先生も含めて）には、支部としてその時々にさまざまなお願いを行いましたが、忘れられないのは学生の自治会 BOX（通称Ｓ自ＢＯＸ）が数年来消滅しており、活動もままならない事から、その新築に対するお願いでした。学生の自治会活動の重要性に鑑み、BOX 新築を心良く引き受けて下さったのは言うまでもありません。

今もBOXを見る度に、当時の事が思い出されます。
さて、あれもこれも思い出すままに文章に綴っていたのでは切りがありません。是非、最後に言っておきたいのは、支部四役を含めた書記局の方々と知り合いになれたのが、私にとって非常に幸運であったと言う事です。皆さん本当に良い方ばかりで組合歴のまだ浅い私を暖かく見守って下さり、又、１年間本当にたくさんの事を教えられ勉強させて下さいました。退官や転勤でほとんどのメンバーが京大を去られ、少し寂しい気もしますが、それだけ年月もたったのだという事でしょう。書記局のメンバーの方達と行った忘年会、うどんすきやったけど、本当に楽しかったなあ、ニコニコ笑った支部長にお酒を注いで貰ったなあ．．．

雑感と近況

1981年度支部長（宇宙分会）　小暮　智一

１９９６年の２月は寒い雪の日でしたが職組理学部支部の結成５０周年の記念行事に参加し、久しぶりに昔の仲間たちと出会い、気持ちの暖まる一日となりました。私が支部長だったのは１９８１年ですから５０年という支部の歴史から見ると新しい部類に入りますが、それでももう１５年も前になり、定年退職から６年が経っています。この数年間は学内の事情も急速に変わりつつあるようですので最近の学部や支部の状況には疎いのですが、社会全般の保守化の傾向は今も変わりなく続いているような感じです。政治や行政の腐敗はこれまでになくひどいものですね。新聞を見ても腹の立つことの多いこの頃です。いったいどこまで行ったら堕落に歯止めがかかるのか、思わず悲観的な気持ちが出てしましますが、歯止めをかけるのは私たちの力以外にはありませんから、長い目で見て、民主化を進める人たちの努力を積み上げるよりないでしょうね。組合はその先頭に立ってほしいと念願しています。幸い、最近は少し芽が出てきたような印象で。民主勢力がこのまま順調に伸びてくれるよう期待しています。これからも是非頑張ってください。
１９８１年度（昭和５６年）は理学部の中でも次第に組合活動が厳しさを増してきた頃でした。副支部長に藤田昇さん（植生）、書記長に大槻義実さん（化学）、書記次長に島貫岬（現菊田）さん（地球）、それに各分会から選出された１８名の支部委員、これが当時の支部体制でした。いろいろの問題を抱えた一年間でしたが、定員外職員の待遇、特昇問題、学部の自治など、どの分野にも文部省からの圧力が強まっていました。しかし、今となっては力を合わせて当局交渉を行ったり、知事選に川口候補を応援して頑張ったりした思い出がよみがえってきます。９月はじめに大原で行った支部合宿も思い出の一こまです。職組の支部活動がますます活発にな

り、学部の研究教育環境の改善に大きな力となるよう願っています。

次にこの場を借りて近況を簡単に書いてみたいと思います。１９９０年に退職してから岡山県美星町の公共天文台の建設に関わり、美星天文台として開館してからは非常勤で毎月２回ほど京都から通っています。この天文台は口径１ｍの大きな望遠鏡をもち、各種の観測装置も備わっていてアマチュアとプロの協力を活動の柱の１つにしていますが、金曜から月曜までは毎晩夜１０時まで公開していますので、大きな望遠鏡で見る星空観望に是非お出かけ下さい。

美星天文台に勤める傍ら、国内外の研究会にも時々顔を出しています。最近はドイツのボンで開かれた国連主催の研究会で先進国と発展途上国の宇宙科学を結ぶ接点の研究会に出席し、いろいろと国連の活動に触発されました。そのあと、南ドイツの幾つかの年をまわり天文関係の史跡を見てきました。シュツッツガルト郊外に今は記念館となっているケプラーの生家を訪ねたときは、母親が魔女として訴えられ、投獄されたときの記録などが残されており、その頃、数年間に５名の女性が火刑になったとか記されています。１７世紀という近代になってもまだ中性の暗い陰が残っているのに驚き、当時の女性の苦しみに痛みを感じたのでした。ところが妙なことに、その町の広場の噴水には農夫や子供たちに混じって箒に乗った魔女の像まで飾ってあるのです。どういうことでしょうね。

1981年度、1982年度の理学部支部書記長を担当して

（化学分会）　大槻　義実

この８１、８２年は、学部長選挙制度の改悪に抗して、色々な活動を展開した２年間でした、支部の元に学部自治推進委員会を設置し、情報収集、分析、学習情宣を企画し実践してきました。（推進委及び世話人は８１年：１６回、８２年：１８回開催）また、久しぶりに３者懇談会（職組、院会、学生自治会）も再開し、２年間共同闘争を組むことが出来ました。この間に学習講演会は芝池義一先生（法学部）浜林正夫先生（一橋大学）の２回開催し、大学自治擁護の闘いのための多くの知識をえることが出来ました。学部長折衝・交渉は８１年１０回。８２年１０回もたれ、支部集会・支部決起集会は、理学部協議会が選挙制度改悪を決定した８３年２月１７日をはさんだ連続５日間の決起・抗議集会を含め１１回開催されました。こうした力により理学部当局主催の説明会を３回開催させることが出来ました。考えられるあらゆる闘争を展開してきましたが、執念にも似た某教授達を中心とした『クーデター』とも言える強引な進め方の前に敗北を喫しました。

当時の総括文によると『今回の学部長選挙をめぐる運動は近来にない盛

り上がりを見せましたが、いくつかの問題があることも明らかになりました。情勢の認識としては、内外ともに厳しいと言ってはきたものの、やはり甘さがありました。そのことが昨年春から夏にかけて運動の展開できない結果となり、秋以降情勢を変える事が出来ませんでした。学部長の対処に期待し、ないしは行きがかり上依存した傾向も運動の在り方として反省されます。この間運動の主体は、学部自治推進委と書記局であり、支部委員会としての討論や取組は遅れました。同じ事は分会にも言えます。最終段階での盛り上がりに支部の底力は発揮されたものの、日常的な支部・分会活動の弱さがあらわれたものとして今後強化すべき重点です。学部自治と行政職との関わりについても、長い歴史を持つにも関わらず、充分受け継がれて、組合員一人一人が確信を持って語れるには至っていないことも指摘されます。
このことは、日常的な仕事で学部の研究・教育を支えているという体験に基づいて、日頃から分会・支部で具体的な問題に取り組むことによって確信が生まれると考えられます。』　このような闘争の結果、その怒りを、行政職の学部長選挙剥奪後、行政職による自主投票は今日まで７回行い、意向を表明し、その結果を４回は反映した人選となりました。
９７年は？。
　８１年には川口是氏（元京大職組委員長）を擁立し京都府知事選挙をたたかいました。また、４月に着任したＦ事務長は従来からの確認事項（定数との関係でやむなく定員外でいる人達の諸権利を原則として定員並に扱うという従来からの認識に変わりはない）を学部長は確認しても、『法的に無理なことをするような確認は出来ない』と拒否し、その後種々の獲得した権利の剥奪をしました。第６次定員削減が決定された年でもありました。
　８２年には鈴木首相の財政非常事態宣言による人事院勧告の凍結という大変な事態もあった１年でした。このほか、定員外職員の共済加入運動や前田豊三氏の公務災害認定闘争等がありました。
　大変な２年間でしたが、当時は私もまだまだ若かったからこそ乗り越えられたのであろう。

理学部支部と理学部長選挙

1982年度副支部長(地鉱分会)　清水　大吉郎

理学部支部の活動で思い出すことは多いが、１９７０年代を中心とする学部長選挙制度の変転を記憶されている方はまだ多いと思う。１９４５年の第二次大戦敗戦までは教授会（２５～３０名）の互選で選出されていたのが、戦争への協力の反省から改正されたのが、敗戦翌年の春と記録されている。学部長が「理学部が率先して民主的に行いたい」と発言して審議が始まったという。３月に全教官（助手及び副手まで）１９１名と書記４名が教授の中から二名連記し、第三位までについて教授・助教授が単記投票で決定するという改正が行われた。これにはその２月１３日に結成された職員組合理学部支部の活動があったことは言うまでもない。書記とは現在の事務官にあたるがごく少なく、その他の職員は雇員・傭人とよばれていた。

１９４８年（昭和２３）に教授と同数の予選委員を教授以外の全教職員から選出され、三名の候補をえらび、それについて教官と事務官が投票してきめるようになった。（この頃も事務官はごく少数）。その後公務員制度の改革や教室増による増員で事務官の数が増加。さらに６０年代終わりからの大学民主化闘争の盛り上がりもあって、非常勤職員の定員化（１９６２）や総長発令制度（１９６７）ができ、１９７３年には一般投票に総長発令の非常勤職員も加わることになった。学生や院生諸君の活動も盛んであった。

あとでわかったことだがこの頃から文部省の圧力が加わり、当事者は検討を約束されていた。自治検討委員会での奮闘もあったが、１９８３年には行政職が完全に排除されてしまった。

その頃私は支部委員などをしていたので交渉にあたって学部長の先生方にずいぶん激しいことも言ったりした。良心的な先生方が当事者になられて大変だったろうなと思う気持ちと、もうちょっと頑張っていただきたかったという気持ちが半々くらいである。

敗因は結局文部省の圧力が強かったということにつきるが、「行政職の多数できまってしまうのでは．．．」という協議会メンバーの一定の不満もあろう。また大学全体の民主運動の弱体化も、押し切られてしまった原因である。大学をめぐる情勢の変化は早く、厳しく、良心的学部長でも何ともできないことが多くなっている。職員組合も困難な状況だが、職員の自主投票は続けられ、その意向は無視できないようである。二十一世紀の大学にむかって全教職員・院生・学生を含めた運動ができる日がくることを願っている。

京都大学理学部長選挙制度の歴史　　１９９３、１、２７（清水）

理学部長の役割・位置づけ

- 教育・研究の場である理学部の代表　教育と研究への情熱と行動力
- 大学内では意志決定機関の構成員（評議会、部局長会議等）
- 学部運営の最高責任者　教員・職員・施設などに責任を持つ
- 教育・研究と行政という二つの面の接点としてまとめる能力・判断力・行動力
- 学部長は戦前からの長い闘争と伝統による大学自治の担い手として、内部で選出される（教特法）いろんな選挙形式が自主的にとられている。

京大理学部長選挙制度の変遷

戦後の民主化期

１９４５年の第二次大戦敗戦までは、教授会での互選（２５～３０名）全学で１００数十名
敗戦後の反省から改革　１９４６年春（昭２１年）（理学部が率先して民主的に行いたい）

１９４６、３月　教授２９、助教授２０、講師４０、助手５２、書記（事務長と掛長）４、副手５０が教授の中から２名連記し、第３位までについて教授・助教授が単記投票で決定（その後協議会が出来る）

【総長および文部省とのやりとりあり、慣行でよいが、最後は教授だけの教授会で決すること】

１９４８年（昭２３）から予選制度が始まる。教授と同数の予選委員を教職員が教室毎に選ぶ。
教授と予選委員とが２名連記で投票し、上位３名を選ぶ。その３名について、教官全員（百数十名）と事務官（４名）が単記で一名を選ぶ。教授会で決定。過半数がないときは上位２名につき教授会で投票し決定する。

１９５５年（昭３０）から協議会を経ることになる。
その後、事務官が増加してくる（ふりかえおよび教室倍増による増員）

１９６２年（昭３７）非常勤職員の定員化

１９６７年（昭４２）総長発令制度

１９６８年（昭４３）任官基準の改定で事務官と技官の増加

全構成員自治を目指して

大学民主化の高まりと大学紛争（１９６９～　）

自衛官入学反対闘争、産学共同反対等々
学生部封鎖（６９年１月）に始まる紛争を全理学部教職員の協力で入試実施などで乗り切り、全構成員自治の声が高まる。
理学部自治懇談会（協議会４、教職員６、院生４、学生自治会３）発足、討論集会が度々開かれた。

１９７１年（昭４６）一般投票に定員内職員全体を入れる。定員外職員は予選投票まで
（一般投票については３１：４２：２で否決）
学生・院生は加えないが予選と一般投票の間に一定期間をおいて、意思表明の出来るようにする（遠隔地のことも考慮、約１週間）

１９７３年（昭４８）一般投票に総長発令を加える（６０ヶ月以上）（３０：２７：１で可決）

１９７４年（昭４９）評議員選挙に参考投票制度（協議会以外の教員で投票、上位十名）

【総長選挙、１９７３年改革、助手まで第一次投票（２名連記、１５名）　講師以上の第２次投票で決定】

しめつけ強化

文部省からの圧力

１９７１年大学学術局長の『学長選挙の問題点』公表されたのはかなり後

１９７３年から理学部長選挙について問い合わせの形で干渉が始まる（全国各大学で露骨な干渉有り）

１９７９年手続第４条、第１６条について検討を約束させられる。

１９８０年検討結果報告書をまとめ、改正は必要だが今回は従来どおりと報告

大学自治の内部からの弱化

１９８１年３月協議会で以上の経過が公表される。同年１０月理学部自治検討委員会設置

１９８２年１０月同委員会報告（まとめと少数意見）

１９８３年１月協議会　同報告を可決（５４：３５：６：１）手続改正委へ　説明会有り
改正案（可６６：否２８：白１）　意向表明（４５：４１：５）

１９８３年３月新学部長選挙実施、行政職を完全排除、職員の自主投票

原因　文部省の圧力（大学側の弱体化、財政的、概算要求でのしめつけなど）
協議会メンバーの一定の不満（行政職の多数で決まる）

民主化側の弱体化（学生、院会、職組）

※改正事項

改定年度	教授以外の予選委員の選出	一般投票の有権者	決定投票	可否投票	備考
～ １９４５	なし		教授会で互選	なし	
１９４６ 昭２１年	なし	教授　助教授　助手 書記（現在の事務長） 講師　副手 ２名連記で３名を選出 教授・助教授　単記で １名を決定	教授会	なし	
１９４８ 昭和２３ 年	助教授　講師　助手　副手 事務官　雇員　傭人 ※教授と同数の他の職員 ２名連記　候補者３名を選出	専任教授　助教授 在籍１年以上の講師 助手　副手　事務官 単記　過半数者有れば１ 名無ければ２名を選出	教授会	なし	
１９５５ 昭和３０ 年	助教授４４　講師１９ 助手５９　事務官６　雇員３８ 傭人２７ ２名連記　３名の候補者を選出	専任教授３６　助教授 講師　助手　事務官 単記　過半数者有れば１ 名無ければ２名を選出	※協議会 約８０	教授会 約３６	
１９７１ 昭和４６ 年	助教授　講師　助手 定員内職員１８７ ※総長発令の非常勤職員６６ 行政職計２５３ ２名連記　３名の候補者を選出	専任教授５９ 助教授６６　講師１４ 助手１２５　計２６４ ※定員内職員１８７ 単記　過半数者有れば１ 名無ければ２名を選出	協議会 約１２５	教授会 ５９	予選と一般投票の間に約１週間を置く　※
１９７３ 昭和４８ 年	助教授　講師　助手 定員内職員１８７ 総長発令の非常勤職員５８ ２名連記　３名の候補者を選出	専任教授６２ 助教授６０　講師１６ 助手１２４ 定員内職員 ※総長発令の非常勤職員 職員計２４５ 単記　過半数者有れば１ 名無ければ２名を選出 次の改悪迄の５回の選挙は全て１名を選出？	協議会 １２２ 教官計 ２６２	教授会 ６２	同上
１９８３ 昭和５８ 年	助教授　講師　助手 ※ ２名連記　１０名の候補者選出	専任教授　助教授 講師　助手 ※単記　５名の候補者を選出	協議会 単記過半数獲得まで５→３→２→１	教授会	予選と一般投票の間に５日間

二つの事件と大学の自治

1994・1982年度支部長(動物分会)田隅　本生

組合員歴２４年５ヶ月の間に、私は理学部支部の副委員長を１回（７６年度）と委員長を２回（８２年度と９４年度）つとめた。一組合員としてこの回数は多いほうかもしれないが。構内の環境改善を目指そうとした７６年度は別として、何かの抱負や自信があって役を引き受けたわけでは決してない。格別の理由がないかぎり避けるのはすじが通らないとか、不甲斐ないとか、依頼には冷たくはできないとかいった気持ちがあったにすぎない。

支部長をしたときは２回とも、重苦しい出来事が理学部内に起きた。当時は誰もが知っていた事件だが、組合の側で整理・記録されたことはなさそうなので、忘れられないうちに当時のメモや記録と『弘報』（１０１－１０９）の記事に基づいて書き留めておきたい。

★支部長の１回目にぶつかったのは「理学部長候補者選挙手続」を変えるのかどうかという問題だった。１９４８年から改正されつつ維持されてきた行政職職員も加わる学部長選挙の方式について、文部省が「教育公務員特例法の趣旨に照らして不適切な部分があるので改正してはどうか」と理学部当局へ尋ねてきたのは、加藤幹太学部長（２度目）時代の末期のことだった。教特法第四条２が「選考は．．．．．学部長については、当該学部の教授会の議に基づき．．．．．行われなければならない。」と定めていることから、行政職職員が選挙に加わるのは不適当だろうというのである。これについては３０年ほども前からときどき文部省から問い合わせがあったよしだが、今度の要請は８１年３月１８日の協議会で突然報告された。それ以来、組合理学部支部はこの動きに厳しく注目するようになった。職員が学部長選挙権を失うのは大きな問題だからである。

次の山口昌哉学部長（２月に従来の選挙方式で選出）の１年目の８１年１０月、協議会の中にこの問題専門の「第２次理学部自治検討委員会」（評議員２、各教室選出の協議会構成員１０、学部長指名委員３の計１５名、うち２名は組合員）が設置された。委員長には巽友正教授（物一）が選ばれた。

「自治検」は、次の選挙までに結論が出せるようにかなりのペースで開かれ、学部自治と学部長の役割、学部長選挙手続の問題などを中心にして延々と検討を重ねた。委員会は８２年１０月までの１年間に１６回も開かれ、そこでの論議は７月以降毎回の協議会で報告された。その過程で８３年２月までに３回公式説明会が共同大講議室などで催される一方、最後に「自治検討委員会報告」（答申）が作成され、これは８２年１０月の協議会で受理された。その《まとめ》には「現行の．．．．．手続には多くの

問題点があり、改定を要する．．．．．」「学部長の選出は教員によって行われるのが適当．．．．．」と記されていた。そののち８３年１月まで４回の協議会でさらに論議が続けられ、結局は投票によって全文が採択された。それに続いて、「自治検」委員全員がそのまま「学部長選挙手続委員会」に移行することが決まった。報告はやがて、８２年１０月付け１０ページに上る「自治検討委員会報告」として『弘報』１０７号で公表された（配布は８３年２月か）。

私が支部長を引き受けた８２年６月は山口学部長の２年目で、「自治検」で議論が行われていた最中である。上記のような経過は同年７月ごろ支部の中に対抗的につくられた「自治推進委員会」や支部委員会に逐一伝えられ、対策が練られた。「自推委」が頻繁に開かれたばかりでなく、学部長・評議員との折衝、学部長との話し合い、学部公式説明会への参加、決起集会、理院協・学生自治会との三者懇談会などがしばしば行われた。説明会はいつも激しく紛糾した。私は２回、巽委員長と面談したことがあった。

具体的な新手続を作る「手続委員会」は大急ぎで起草の作業を進め、２月１７日の協議会に改正案を提出した。公聴会を開くという提案が否決された後、改正案は原案どおりに可決され、こうして行政職職員を除外する現行の選挙手続が４度目の改正として成立した。次の選挙にかろうじて”間に合った”のである。ここまでに協議会では何度も投票が行われたが、改定に向かう票は総数約９５票のなかでいつも６～７割であった。支部は２月１８日に抗議集会を開いて締めくくったが、これはむろん”遠ぼえ”に終わった。

それでさっそく新手続による次期学部長選挙が行われ、３月１６日の臨時協議会で選出された暫定候補者は、巽教授その人だった（８９票中４６票）。それに続く教授会の可否投票で同教授は学部長候補者として確定した。

当時の私のメモによると、支部長をした１年間だけでも組合関係の集会は、学部長選挙の対策会議（自主投票の慣行をつくった）、３月１８日の評議員選挙の対策会議などもふくめて、１６０回を越えた。それほど支部は職員を選挙から外そうとする動きに抵抗したのだが、諸条件がこちらに有利でなかった。ヤマ場の８２年度後半、私は支部長として器量がなさすぎ、適任でないことは明らかだった。それは支部にとって不運なことだったが、運動が科学界全体の風潮に逆らうような要素もあった。

いま顧みれば、この騒ぎで印象に残ることが二つある。第一は、「報告」の文末に付記された田中正委員（物二）の反対の少数意見に記されているとおり、答申の大学自治の基盤を掘りくずし弱めるばかりでなく、教育研究という共通の目的に向かって培われてきた教員と職員の信頼関係、相互協力をくずす．．．．．。．．．．．現行方式に若干の修正を加えれ

ばその是正は可能であり．．．．．」という見方である。私は今でもこれは至当だと思っている。答申では格調高い”向上心”が目につき、教授が圧倒的な権威をもっていた時代を思わせるところがある。が、大学は不可避的に制覇と権威を目ざす集団であるから、この気風がなくなるはずもない。第二は、そういう大学も、それ故にこそ最高権力者たる文部省の圧力にははなはだ弱いということ。文部省に楯突くのはまずいという思惑があるとすれば、独立性は当然弱くなる。時とともに科学研究に大きな資金が必要になればなるほど、大学が文部省の言うままになる可能性は強まるにちがいない。

大学の構造を理解不能のものにしてしまった”大学改革”は、その一つの表れではなかったのか。昨今は第二弾として”教員の任期制”が導入されようとしているが、大学側はこれをやはりおとなしく受け入れるのか。大学は政府のウマやイヌになるのか。お上の恐怖政治は永久に続くのだろうか。

★私が支部長２回目（鎮西清高学部長の１年目）に遭遇したのは、通称”郡役所”つまり支部ボックスの建物をめぐるトラブルである。ボックスは宇宙物理旧館の地下から郡役所（もと地鉱の工場で、昔は京都府愛宕〔おたぎ〕郡の鴨川治水事務所だったという木造平屋）の一室に移り、そこで２０年ほど過ごしてきた。１９３６年建築の動物・植物旧館の全面改築と撤去にともない、いずれはこの建物も撤去される見通しになっていた。

ところが、９３年２月ごろから隣室（倉庫）に正体不明の若者一人が勝手に住みつき、玄関の中（ガス栓と手洗台があった）を汚く使って自炊生活をするようになった。支部委員会を開いているときにマナイタで何かをきざむ音が聞こえてきたり、魚を焼く匂いがもれてきたりする。彼は一応教育がありそうで穏和な性質らしかったが、昼休みなどにボックスを利用する組合員は大きな迷惑をうけ、ときどきその若者といさかいを起こしていた。雰囲気の気味悪さから、組合員がボックスを忌避する傾向も生じた。管理者たる理学部当局が立ち退きを求めても、彼は応じようとしなかった。そうするうちに、９４年１０月に動植新館が完成し、３階建てだった旧本館は９５年５月までに取り壊され、跡は更地になった。

もともと使い心地の悪かった支部ボックスは、動物が移転を終えたあと無人になった旧動物別館（理学部事務室が管理）へ移る予定になっていた。ところが５月の末日、その若者ら数人が施錠されていた旧別館へ窓から侵入して内部を物色し、さらに６月４日（日）に多数の正体不明者（遊芸指向か）がまた侵入し、一挙にこの建物を占拠したのである。支部はやむなく旧別館への移転をあきらめ、理学部当局の計らいで移転先を暫定的に新館１階の一室に変更した。６月２０日、支部委員らが総出で引っ越しをすませました。

ボックスが移転したのち２ヶ月余にわたり、郡役所と旧別館はさながら”解放区”のようになった。占拠者らは旧別館を「錦司ハウス」と名付けて終日解放し、公然と好き勝手に使っていた。玄関前にはドラム缶の野天風呂が築かれ、ベッドや布団をはじめ大量の物品が車で運び込まれた。リーダーがおらず、何かの主義主張をもつグループとは思えない”軟派”の男女が日夜出入りし、大学側を愚弄するビラを作ってときどき学内外にばらまいていた。大きな、無意不明の図像がいたる所になぐりがきされ、呼び込みの立看板さえ現れた。やがてはシンナー少年らも加わるようになった。それは、京大の歴史上おそらく前代未聞の無政府状態だった。

７月１９日には、学部長の要請により、朝８時から約１００名の理学部教員が旧別館の裏に集まって見守るなかで電源の切り換えが行われ、同館では電気が使えなくなった。その結果、当局側の説得もあって、さしもの占拠者たちも持ち物を運び出し、どこへともなく退散していった、旧別館の一部にまだ置いてあった研究器材や飼育動物は、８月中に移動を余儀なくされた。両建物は急きょ撤去が繰り上げられ、ともに９月末までに姿をけした。１９３４年いらい故山口左仲（別館の寄贈者で寄生虫学者）、故今西錦司、故徳田御稔、伊谷純一郎氏らをはじめ、幾多の個性的なナチュラリストたちが研究の拠点にした旧動物別館（昔は通称「特研」）は、こうして６１年間の役割を終えたのである。

世紀末的頽廃と混沌を教育研究の場に持ちこんだこの事件は、不特定多数の学内者が関係する学部自治の一面をあらためて考えてさせた。あの若者が居すわった約２年半の間に、建物管理について幾つかの手落ちがあったことは確かで、それが無意味な騒ぎの基になった。現代は世界的に、空きビルがあれば勝手に占拠される時代であるらしいが、こちらではまだ不要になっていない建物が占拠され、使用中止に追い込まれたのだ。外圧ー上の政府からと下のゲリラからーに、大学は無防備なのである。

経過と対策については私は当時いろいろな疑問を感じていた。大学の”治外法権”につけこむ卑怯者たちに断固対処するのも教育の一部ではないか。こうした場合にさえ、下鴨署には頼るべきではないというのか。東大学生部には「警務掛」があるのに、京大に無いのは何故か。教育研究の水準はアメリカの大学なみにというのなら、大学自体が自警組織（武力）を備えて安静を守ることも見習ってはどうか。それとも、タカでもハトでもない道の見方を探求すべきなのか。．．．．．これに正解が出るのは何年も先のことだろうが、２１世紀にむけてまた様々な事件が起こるだろう。しかし今では、学部内の慎重な協力により、ねばり強く時間をかけて、降ってわいた難問を平和裏に解決された理学部中枢の皆さんの努力には、謝意と敬意をささげたいと私は思っている。

文教破壊をめざす政府と頽廃したゲリラに狭まれて、社会的実践力の乏

しい大学人たちはどのようにして正しい教育研究の府を守り育てるのか。教員と職員が心をかよわせつつ協力せずして、何を達成することができるだろうか。　　（元理学部助教授、動物学）

1986年度～1988年度の思い出

1986～88年度書記長（地球分会）　東　敏博

この３年間、『見える組合運動』を基本として活動を行ってきましたが、強く印象に残っているのはやはり１９８６年度です。

初めての学部長交渉は、１２月に、「定員外職員の定員化」「事務機構」等について行いましたが、参加者３７名で会議室が（５Ｆゼミ室）が満員になった記憶があります。

この年の合宿は、大原において、特別講演を細野武男元立命大総長にお願いしました。これは、支部委員の山口昌哉元理学部長の紹介でしたが、４５名の参加で１６名の宿泊者があり、盛り上がった合宿となりました。又、学部長との懇談の結果、第１回学部長杯バレーボール大会を８チームの参加で秋に開催しましたが、これはいつの間にか中止になったようです。

２年目（１９８７年度）は「事務機構問題」「環境問題」等を中心にして、２度の学部長交渉、１０数回の事務長折衝を行いました。

この年は役員改選に手間取り、今と同様になり手がなく、結局、書記長、書記次長留任で１０月に大会を開催しました。これを教訓に、役員選出方法を検討し、南北ブロックに分けて役員を選ぶ方式を採用することになりました。

１９８８年度は、総評が解散し、日教組大学部が「全大教」となるといったように、労働戦線をめぐる情勢はめまぐるしいものでした。

学内では、『行政措置要求』による昇格改善運動とともに時間雇用職員問題についての学習会を初めて開きました。又、車の洪水から歩行者を守るために、
理学部独自で、理学部南門から北へ『歩行者用道路』を作らせることができました。

おわりに、３年間の書記長はやはり長く、２年が限度かなと思いますが書記次長として３年間支えてもらった入野氏には深く感謝しています。

支部長・副支部長のうち３名の方が他機関に転出されましたし、又、交渉相手だった３名の学部長（寺本英・長谷川博一・日高敏隆各教授）のうち、２名の方が鬼籍にはいられました。

歳月を感じるこの頃です。

支部ボックスの床

1989年度支部長(物理分会)　宮地　英紀

１９８９年度は政治的にも組合組織についても激動の年度であった。７月の参議院選挙で保革逆転が起きた。労働戦線も総評が解体して「連合」が登場していたが、京大職組は参加しなかった。日教組大学部は「全大教」へと独立し京大職組も参加した。京都府知事選で木村万平氏が敗北した。このような環境に対処したのは西村氏（球）で、「支部独自の問題、特に定員外の定員化を実現したい」と支部大会で挨拶した私は、田中（植）、大槻（化）、富田（球）の三氏（四役）と入野氏（鉱）の助けと献身的な堤氏（鉱）の働きで支部委員会、書記局会議、学部長・事務長交渉、定員問題プロジェクト、合宿、ビアパーティなど総計５０回ほどの活動をなんとか維持した。

結果として、定員外の定員化は実現せず私は敗北した。理学部内部では、この「定員化」については好意的であった。教員側は「定員削減」で研究・教育支援の定員が大幅に減らされ（教員の定員も減らされているが当時は空きポストを廻して問題にならなかった。）やむなく定員外職員を雇用する。「仮定員」（この用語がわからない方は勉強して下さい。）以内では理学部から一定の予算は出るが、ともかく「自腹を切っている」ので「定員化」への要望は教室主任も積極的であった。人事院規則の改訂があり、定員は全て公務員試験合格者でなければならないと思われていたが、入野氏が調べると上級・中級・初級職がⅢ級・Ⅱ級・Ⅰ級と呼び方が変わっただけで、依然として定員外の定員化は可能であることが分かった。事務長は「原則的に定員化は可能だが、組合が本部事務局、文部省、人事院を説得できるよい知恵を出してほしい」という態度であった。丁度、公務員試験合格者名簿が無く、空きポストがあるというチャンスに恵まれたが、我々の力量不足で候補者を晒し者にしただけで終わってしまい、痛恨の極みであった。この反省から、組合で「定員問題プロジェクト」を作り「定員外も定員の数に算定して、理学部全体としての配置を考える」という案が浮かんだが、このような人事については個人のそれぞれの歴史と事情があり、総論賛成・各論反対で頓挫した。事務長はその間、定員・定員外の配置転換、解雇を行い、事務機構検討委員会の報告が出されて、組合支部としては「得意の後手」に廻って、批判をするのが精一杯であった。

一年間の活動で得たものは支部ボックスの床がコンクリートから樹脂になったことのみであった。しかし、富田克敏氏（鉱）を京大職組の委員長に支部から送り出し、湾岸戦争に対して素早く反対声明を出すなど組合の本領を引き出されたこと、尾池（球）、藤原（物２）、平井（物１）、入野の４氏に次年度の支部４役を引き継ぎ、組合活動を活発化したことを誇りに思っている。

理学部支部50周年記念に寄せて

1990･1992年他書記長平井栄子

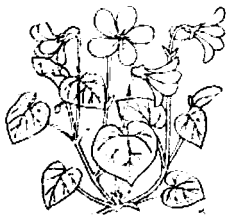
創立５０周年おめでとうございます。京大職組理学部支部創立５０年をむかえるということは大変感動的な事だと思います。私は、１９８５年にウイルス研究所から異動してきて、１９９０年に初めて理学部支部の書記長をやらせて頂きました。支部委員長に尾池和夫さん、副支部委員長に藤原顕さん、書記次長に入野健志さん達と一緒でした。支部委員長とは全く面識がありませんでしたので大変緊張をしていました。だからその分、何かをやりきらねばとの思いも相当なものでしたが、顔会わせに行った時、開口一番、「飾りじゃないのよ支部長は・・・・」と言ったらしいのです（よく言えたものです）。その時の学内情勢は、大学院重点化の議論が進んでいました。当時の学部長は、化学の丸山さんだったと思います。学部長曰く、大学院の重点化をすれば定員が増える、定員外職員の定員化につながる。だからどうしても大学院の重点化が必要なのである。と力説されたことをはっきり覚えています。しかし、重点化が終わった今、そうなったのでしょうか？

今、思えばもっとやるべき事があったのかもしれません。それは結果論にすぎませんが、それはそれとして、私たちは精一杯活動をしてきました。支部の四役が各分会の組合員を知らないのはよくない、また支部の活動や支部として取り上げて欲しい事等を聞きましょうということで分会めぐりを計画をしました。また、この広い理学部の中の各職場でどんな仕事をしているのか知っておくのもいいかなと、職場めぐりも行いました。

理学部では初めて書記長をやったのですが、とても楽しくユニークな活動を思い出します。

組合は働く者にとってはなくてはならないものだと思っています。今は、働く者の要求がなかなか実現しませんが、こんな時だからこそ支部役員自身の要求に基づき楽天的に、しかし、ねばり強く、なによりも地道な運動がとても大切だと思います。

今、大学は、行政改革と言う名の基に定員削減をはじめとして大学に働く職員に攻撃をかけてきています。だからこそ組合が必要なのです。理学部支部創立５０年の重みをしっかり受け止めて今後の発展を期待します。私も組合員の一人です。みんなと一緒に楽しくやりたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。



科学に寄せる思い

1991年度副支部長(化学分会)　吉村　洋介

昨年度、理学部支部の機関紙をやっていて、戦後、理学部支部ができて間もないころの事業として「京大理学普及講座」があることを教えられました。清水大吉郎元副支部長から届けられた本は、その一冊、森主一著「野鳥の囀りと環境」（４７年２月再版、初版は４６年１１月）でした。ぼくはこの本を通勤の道すがら読んで、ぼくたちが持っていない、ほとばしるような思いに打たれました。それは端的に言うと「人びとが科学的にものごとを考えさえしていたならば、先の戦争の惨禍はなかった」という思いです。否が応でも「時局」と向き合わなければならなかった時、多くの人備置は天皇を頂点とする神話を受け入れ、それに寄りかかり、まさに頭から破局の中に飛び込んでいった。その時、神話でなく「科学」に寄っておれば．．．そうした思いには、たしかに納得できるものがあります。しかし、ぼくはこうした信念を共有できない自分を感じています。はたして、科学というのはそうした期待に応えうるものだろうか？

ぼくが中学校のころ、ベトナム戦争が激しく戦われていました、そのころＢ２５爆撃機がじゅうたん爆撃をしている様子をテレビで見て、ショックだったことを今も忘れません。眼下に広がる森林地帯にポッポッと現れる煙。その煙が立ち昇るたびに、だれかが死んでいくのです。なんともやるせない気分でした。そのＢ２５爆撃機は、近代科学の枠を集めたものであるし、それに敵対するものは民族という神話を奉じている”頑迷”な人びと。　大学に入ったころは、まだ大学紛争の余燼の残るころでした。あちこちに「反帝、反スタ、世界革命」といった落書きがありました。ソ連がロシアになり、センセーショナルにスターリンの悪逆非道ぶりを報じる向きがありますが、当時、古本屋にいけば、いくらでもスターリン主義の問題を論じた本が転がっていました。そうしたスターリン時代のソ連で、無残な行為が科学の名の下に行われていたこともショックでした。

敗戦直後、支部発足当時の人びとが科学に対して語った熱い思いは、今を生きているぼくには、どこかそらぞらしく響きます。ぼくに何か積極的な話をしろと言われても、せいぜいのところ「科学は中立だね」と、もごもご呟くことができるぐらいです。しかし、「科学は人をしあわせにする」という無邪気な考えは、今はやりの「基礎科学の必要性の大合唱な中にも生き長らえているようです。ただその大きなちがいは、敗戦直後の科学に対する「信仰告白」にあったあたら良い時代への希望の疼きが失われ、金欲しさの言い訳めいて聞こえるところでしょうか。ぼくは、科学への単純な思い入れには関与できませんが、支部発足当時の諸先輩方の、明るい明日に向けた希望のまなざしは、できるだけ受け継いでいきたいと考えています。

思い出

1993年度書記次長(物理分会)　齊藤　広佳(旧姓　有田)

京都大学職員組合　理学部支部のみなさん、お元気ですか。北部の銀杏並木もそろそろ黄色くなるころでしょうか。はやいもので京都を離れて1年2ヶ月余りがたちました。退職してから1，2ヶ月くらいの間は時々、「書記局から支部委員会の会議で支部 BOX にいつ」という夢をみていましたが、最近はそういうこともなくなりました。（夢の中の支部 BOX は新動植館・1Fの仮 BOX でした。今、支部 BOX はどこにありますか？）でも、春になれば「あぁメーデーの頃やなぁ。」、夏には「総会の準備してるかなぁ。」、「ビアパーティーは、7月かな？9月かな？」と組合の行事のことを思い出しながら暮らしています。支部の活動には1992年支部委員、1993年書記次長、1994年書記局員&支部委員と3年続けて参加しました。書記次長に立候補をすすめられた時は、「私にはできませんー！無理ですー！」と断り続けましたが、物理分会の方々に励まされ、書記次長に立候補することを決心（ちょっと大げさですか？）しました。決心したものの、何をしたらよいのかわからず、「頼りなくて、ごめんなさい！」と心の中で思いながら、ただただ会議の席についていました。そんな私もまわりの書記局、支部委員会の方々にサポートしていただいて1年間つとめることができました。週5日のうち、2日間昼休みが組合にあてられるのですから、なかなかつらいものもありましたが、普通の仕事をしているだけでは出会えなかっただろうたくさんの方々と会えて、いろいろな話ができて、ほんとうに充実していたなぁと、やってよかったなぁと思います。今回「思い出」の原稿の依頼があった時、うーんと振り返ってみたのですが、すみません、みなさんと楽しく過ごした『宴』ばかりが思い出されます。

9月涼しすぎるかな、でもビアパーティー、忘年会に新年会、送別会（「卒業」の幕に少ししんみりしました）、楽しい会．．．etc「楽しい組合活動ワーキンググループ」は存続していますか？この楽しい思い出をいつまでも大事にしていこうと思います。組合支部活動を続けていく時、楽しいことばかりでなくしんどく、めんどうなことも多々ありますが、組合員一人一人が少しずつ力を出し合って、これからも頑張って下さい。遠く和光より応援しています。

4. 一口メッセージ

結成５０周年おめでとうございます。
今後益々のご活躍と皆様方のご健康をお祈り致します。

朝生　勝子

当然のようにある組合もたくさんの人たちの手によって作られてきたことを５０周年という言葉に実感させられます。
先駆者たちに感謝とこれからの活動のはげみとなります。

麻生　和彦

京大職組理学部支部５０周年おめでとうございます。組合の原点は「連帯」です。多くの「組合」がその心を忘れて利権集団になっている今、理学部支部こそ連帯の和を広げ着実に輪を大きくしてゆくよう期待しています。

池内　了

京大に初めて勤めたのが理学部地球物理学教室で、入った頃、勤務評定反対の短冊が庭木のあちらこちらにつるしてありました。
その後の大学紛争、若い時は、訳もわからず、何かにつられるように行動していました。（あやつるではありません。）
宇宙物理の地下にあった支部 BOX で大事な春コートに黒のインクをつけてしまったこと、教室会議で河並さんと大ゲンカをしたこと etc、理学部支部時代の組合は私の青春時代の１ページです。

池田　ひろ子

５０周年、大変おめでとうございます。
わざわざご連絡ありがとうございました。
昨年定年退官し、京都方面へ戻りたく思てはおりますが、すでに当地在住が長く御地に生活の基盤がないので果たせません。元委員長 杉本昭七、町田茂　諸先生にくれぐれもよろしくお伝えください。ありがとうございました。

伊藤　榮彦

退職して１３年経ちました。在職中の３６年間の方が短かったような気がします。発足当時のこと断片的に思い出しています。

今井　敏子

５０周年バンザイ！！
先輩たちが築いてきた歴史の重みをこれからの組合運動に生かしていきたい。

入野　健志

組合結成５０周年祝寿　突然のおさそいで驚きました。１９６４年天文台初代事務官を退職以来私は東京に。
数年来は書家、岩佐菟　として民主的文化人の仲間と存在しています。貴組合の動きは全く情報を得ていません。ご挨拶にあります民主主義を信頼し、講演会のご盛会ご成功を祈り今後の活躍に遠い空、異分野から連帯の拍手とどけ。

岩佐　聡子

理学部を離れて１０年以上経ってしまいました。職組のことなど耳にすることもあります。東大では管理職で組合とは離れておりましたが、技術職員の問題には時間を割きました。東大も９５年３月に退官し、　今は立教大学理学部で少し研究生活に戻っています。生物学多様性が話題になっていることから、結構ﾊﾞﾀﾊﾞﾀしています。盛会を　お祈りいたします。

岩槻　邦男

理学部支部結成５０周年おめでとう。戦後の混乱した時代から一貫して、大学の民主化の為に活動されてきたことに敬意を表します。
今日の労働組合丸抱えての翼賛体制の元で新たな矛盾は大きくなっています。
理学部支部の今後の躍進が、京大職組の発展、更に日本の民主的な労働組合の発展へとつながって行くと思います。５０年という大きな節目にあたり、これまでの運動を振り返り、新たな一歩を共に踏み出したいと思います。

大槻　義実

職組５０周年おめでとうございます。
民主主義の躍進を心よりお祈りします。

大西　良照

祝賀会のご案内ありがとうございました。久々振りに、結成当時のこと追憶致しました。戦争に負け、のんびりなって、さてということ、それまで不当に扱われてたと思う人々、私の場合は、１０年余り初任給と殆ど同じ手当に据置かれてた講師、更にひどい副手全然無給の職員・研究者など、学部で一番大きな数学教室大講堂に集まり、けんけんごうごううったえて、理学部にも教員組合をつくろうということになった。工学部には西山卯三さんが中心になって既に結成されていたのについでできたのである。京大としては本部の職員組合と一緒になって教職員組合になったように憶えている。
会の盛々ﾃﾞﾓｸﾗﾃｨｯｸの発展を！！

小野　喜三郎

京大職組理学部支部組合結成５０周年おめでとうございます。私は定員外職員として長年勤務しておりましたので大変お世話になりました。特に冨田三朗さんがいつも真剣に、前向きに、そして寛大に対応して下さったことが強く印象に残っています。厳しい現実の中での組合活動は大変でしょうが若々しくがんばって下さい。今後の増々の発展を祈っています。

小幡　貞

職組のますますの発展を祈り上げます。

恩地　勝

戦後５０年の節目の年に、私は定年退職します。この間組合とともに約４０年間通してきました。安保の時期、倍増計画の時期大学紛争の時期等、組合はそれぞれ重要な役割を果たして来ました。８０年代に入り、総評の解体とともに労働戦線が弱体化し、労働者や庶民の要求を実現て行く、 チャネルが細くなって来たのは残念ですが、これから２１世紀に向けて人類の生存をかけた広範な運動の再構築が望まれます。

加藤　利三

理学部支部結成５０周年おめでとうございます。政府は住専問題で庶民、働く者達にいわれのない負担を強いようとしています。これは断じて許せない事です。今、再び働く者達が連帯する時だと思います。今後益々京都大学職員組合、並びに理学部支部が発展される事を祈念いたします。私も旧友との再会を楽しみに参加させていただきます。

金児　一夫

激動の５０年だったと思います。
歴史はくりかえすのでしょうか、かっての重苦しい世相を思い出すこのごろですが、ひとりひとりがしっかりと立ち上がることが大事です。

亀井　節夫

平田君、ガンバッテね。

川口　市郎

結成５０周年おめでとうございます。皆様に、お会いできるのを楽しみにしております。
知らせて頂き、嬉しく思います。ありがとうございました。

川口　光子

５０周年おめでとうございます。組合が、理学部の研究教育の発展に寄与していることが、外からみていると良く判ります。
定員外職員問題など、未解決の課題の解決に向かって、ますます頑張ってください。

川平　浩二

お知らせ頂き誠にありがとうございました。５０周年記念おめでとう祝賀会で支部の皆さんにお合い出来るのがとても楽しみです。喜んで出席します。

北尾　賢一

理学部支部結成５０年おめでとうございます。最近どうも明らかに不合理と思える事柄が、のさばっている気がします。
合理性を尊ぶ科学者としての（科学にたずさわるもの）理念を生かした活動を今後も続けていって下さい。

小泉　尚嗣

５０周年おめでとうございます。５０年の歴史を正しく総括し、次の５０年に向かって力強い第一歩を踏み出そうではありませんか。京都大学職員組合のさらなる前進のために、益々の御協力をお願い申し上げます。

麹谷　信三

久しぶりに昔の皆さんにもお会いし、最近の活動について伺うことが出来ることを楽しみにしております。ご盛会をお祈りします。

小暮　智一

京大在職中種々お世話になりました。
貴支部の一層の発展を祈念いたします。

小林　晨作

結成５０年、おめでとうございます。
理学部支部の存在が真面目に働く人々を守り続けますように...

小林　芳子

理学部支部５０周年おめでとうございます。現支部長平田さんたちと支部活動をやった頃のことなどなつかしく思います。
支部の益々の発展と皆様の御健勝をお祈りします。

小林　芳正

私が理学部に就職した頃は、大学紛争の真最中でした。連日のように行われた全構成員自治による構成員集会。この集会で私は、随分多くのことを学んだように思います。
あれから２５年余。大学は随分変わりました。この大きな変換期に働けたことは、意義深いことかなとも思いますがいい方向に向かっているとも思えません。
２１世紀の大学の有り様が不透明ではありますが、若い人達にﾊﾞﾄﾝﾀｯﾁするためにも組合の果たす役割はますます大きいと思います。

小松　千代

東大をめざした極端な偏差値教育はｵｳﾑ、住専問題などひずんだ社会を形成しているのではないでしょうか？
今大学教育は根底から見直されるべき時期に来ていると思われますが。組合活動はより重要な意味を持つと思います。

小山　博滋

京大職組理学部支部結成５０周年おめでとうございます。
遠く和光から、理支部の発展と５０周年”楽しい”祝賀会の成功をお祈りします。
また京都へ行くことがありましたら、寄らせていただきます。まだまだ寒い日が続きますが、皆様風邪などひかれませんよう、お気を付け下さい。

齊藤　広佳

職員組合の役割は「教職員の待遇」についてだけでなく、「民主主義の実践」「平和維持」などのために、大きかったと思います。世界、日本、大学の現状と将来をみつめた活動がこれからもできればよい、と思っています。

斉藤　衛

５０年をむかえて組合の今日的意義を考えていく機会になればと思います。

坂本　宏

結成５０年おめでとうございます。支部のますますの発展を祈念いたします。

迫　　幹雄

５０周年おめでとうございます。日本の労働運動も、大きな岐路を迎えていますが、今の日本をつくりあげてきたのも、労働運動だったわけです。
”弱肉強食”の時代（大人社会の反映、女子供のいじめをみるまでもなく）人間を忘れない労働運動が問い直されている様に思います。私達の組合を大事にしてゆきましょう。

笹原　百合子

５０周年おめでとうございます。ご発展をお祈りいたします。

佐藤　桂子

まずは、おめでとうございます。
当時、定員外職員削減反対の闘いに加わらせていただいたのを懐かしく思い出しております。現在も大学の分室にて、ﾊﾟｰﾄとして働いておりますが、労働条件は、悪くなる一方です。
皆様の更なる日々の闘いを遠くから応援しております。

佐藤　早智子

京大理学部職員の生活と権利を守るため組合の発展を祈ります。
世界の、日本の、京大の中の、”南北問題”を直視しましょう。

志岐　常正

職員組合理学部支部結成５０周年誠におめでとうございます。記念行事の盛大なることと、理学部支部の益々のご発展を心より祈っています。

重富　國宏

ご案内をいただきありがとうございました。２０数年前、物理学教室図書室に勤務しておりました。（約５年間）いろいろ思い返してなつかしさで一杯です。
理学部支部の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

杉本　敬子

弱者に強い職組をモットーに頑張って下さい。

高橋　えいこ

OB,OG のみなさん、遠路御苦労様です。
平和と民主主義、学問の独立、自由と生活のために団結をして５０年、今ふりかえっても、意義深いことであったと思います。これからさらに5年、１０年、２０年と共に前進しましょう。

高橋　四郎

理学部としての輝かしい歴史と組合の闘いの歴史を有している理学部支部が５０年を迎えられたことを共に喜びたいと思います。

竹村　心

昨年９月末に辞職するまで２４年５ヶ月、組合員として過ごしましたが、至って短いものでした。顧みれば、歴史のほぼ半分だったことになります。これからの５０年もアッいう間でしょうが、存在感の大きい組合にしてほしいと願っています。

田隅　本生

理学部支部結成５０周年おめでとうございます。昨年の工学部支部にひきつづいて京大職組の中心的な支部がまた、伝統ある支部がつぎつぎと５０年を迎えていかれるのですね。歴史の重味というものを実感致します。
昨年は戦後５０年、今年は憲法５０年、沖縄のあの積もりに積もった静かな怒りが、いま目に見える形で噴出していますが、大学での憤りも再び大きく燃え上がることを切に希望しております。その中で理学部支部が大きな役割を果されますよう期待しております。
理学部支部の一層のご発展をお祈り致します

田中　穣二

結成以来、職組理学部の活動は理学部の姿勢のしゃんとした有り様に大きい影響力をもってきました。全国での京大の比重、学内での理学部の比重を考えると、実に意義深いことと思います。
新しい５０年のはじまりにあたり、今後のお元気な活動を OB として心より期待しています。

玉垣　良三

これからの発展をお祈りいたします。

田村　尚美

理学部記念行事のお知らせいただきありがとうございました。ご盛会と理学部のますますのご発展お祈りしています。

辻　　英夫

おめでとうございます。今後一層のご発展を！

都築　俊夫

私が組合にいた時は、革新勢力の隆盛期でした。今は一寸ちがうがこんな時代にこそ団結、組合が必要である。又、経済は不況・雇用不安を口実に定期昇給・ﾍﾞｰｽｱｯﾌﾟの見直しを打ち出しています。真のねらいは定期昇給昇格にあります。残念ながら連合は同調の傾向です、公務員給 与は今だに１年１号昇給付法で確立していません。
大学教官の任期制等・大学をとりまく情勢はますますきびしくなります頑張って下さい。

冨田　三朗

私は働く続けるための良き理解者である組合に３０年前に入りました。保育所時代は産休代替要員、授乳時間の確保、ﾊﾞｻﾞｰへの支援、本当にたくさんの暖かい支援をいただきました。
理学部支部は又、定員問題、学問の自由を守るたたかいも絶ゆまず、運動して来ました。その歴史を振り返ると、退職した人、配転した人々のいろいろな表情や、力説ぶりを想い出すことが出来ます。理学部で長い間、働き続けて来れたことは幸せと思います。私はまだ筋道立てて話をしたり、科学的なものの考え方は出来ていませんが、ものを考える時は、私の感覚以外の別の見方や科学的な考え方が存在する、と思うことは出来るようになりました。
未組合員の人々も、この雰囲気は体感されていると思います。ますますの支部の発展をみんなで一同に会して祝いたいと思います。

富田　房江

理学部支部結成５０周年、おめでとうございます。
私にとって、生きるということは働くということ。そして、働きはじめてすぐに加入した職員組合の歴史は、私の歴史でもあります。
民主主義を貫き、みんなの心をつなぎ、もっともっと大勢の働く人達が結集できる組合へ、大きく前進を！

中川　恵子

理学部支部結成５０周年おめでとうございます。
支部在籍短期間でしたが、その後組合から離れざるを得なくなり、誠になつかしく感じます。
平和と民主主義、働く者の権利と生活を守る為、一層の発展を願わずにはいられません。

中川　好昭

５０周年おめでとうございます。
今後の一層ご活躍下さい。

中沢　清

京大より宮崎大学に転勤しましたが７年前になります。今は宮大を定年退官して入院治療に入っています。骨髄腫というやっかいな病で入院もまもなく１年になります。
激動する社会情勢ですが、それだけ分かりやすくなって来ました。組合員の団結が本意の貴組合の発展を望んでいます。

中村　輝男(故人)

組合結成５０周年おめでとうございます。
なつかしい京大職組からのお手紙で職場を離れて、もう１０年以上たつのにお手紙をいただいたのは支部委員をしたからかなと当時を思い出してなつかしくなりました。「いちょう」は今も出しているのかしら？

中村　やよい

京大職組理学部支部結成５０周年おめでとうございます。理学部を退職して半年がたちましたが、この間、世の中は大きな変化をまざまざと人の目にみせて来ています。特に政治は国民の意志と反対の方へ動いていっています。そういう中での理学部支部の闘いを学外から見守っています。頑張ってください。

西　　勝也

組合の今後ますますのご発展とご活躍を祈願致しております。

西村　奎吾

京大職員組合理学部支部５０周年、本当におめでとうございます。
民主主義を貫き、大いなる活躍を今後も続けて行かれる事と存じます。エールをお送りします。

西森　啓子

近年にない大雪と寒波に見舞われ組合員の皆様お元気でしょうか。
来る市長選に向けて私も一声知人に掛けて皆様と共に頑張りたいと思います。
皆様と再会の日楽しみにしております。

畠中　一江

ご盛会をお祈りします。

初田　惣一郎

３年間（H4.4.1 ～ H7.3.31）在職中何かと御迷惑をかけたことや、多忙に追われ何も協力、参加出来なかったこと、本当に申し訳ありませんでした。

羽村　明美

理学部支部５０周年おめでとうございます。５０年の歴史、歩み、闘い、等々貴重な資料、財産を現在の組合活動にどう生かしてゆくか、大変大きな責任を感じます。
しかし、今後ますます、発展すると確信しています。
民主主義と、団結の力があるかぎり。
これからも頑張りましょう。

平井　栄子

５０周年記念おめでとうございます。案内文にありますように、民主主義の担い手としての輝かしい歴史に敬意を表します。
ご案内ありがとうございました。
今後も職組がますます発展するよう祈っております。皆様によろしく。

藤原　顕

特に学部長選挙への職員の参加が長くつづいた歴史は消えるものではありません。
今日、大学改革の嵐が吹きあれていますが、大学や学部の運営に職員がどうかかわっていくかが問われていると思います。参加の形態は画一的なものでないと思いますが、是非、貴支部が先進的な事例を実現されることを期待します。

深見　健次

理学部から人間学部（旧教養部）に移動して１７年になります。
１３年間いた理学部時代より長くなりましたが、どちらも組合員数が少なくなってきている様ですがこれからもがんばりましょう。

藤井　佑生

結成５０年おめでとうございます。私もその中の数年間お世話になりありがとうございました。もう理学部にもどれるかどうかわかりませんが、今後ますますのご発展を祈念します。

藤森　隆志

組合員のみなさんこんにちは。
５０周年記念を迎えられおめでとうございます。
私事でありますが、農学部附属演習林に４７年、理学部（臨時時間雇用）に３年で京大に５０年間勤務させていただき現在民間で務めております。元組合員の一人です。
これからも組合活動に頑張って下さい陰ながら応援しております。

藤原　守

おめでとうございます。
婦人部も一昨年３０周年記念事業を行い、盛り上がりました。
理学部は、様々な角度からいつも私達を引っ張り、力づけられました。
これからも益々のご発展を！

古川　房子

組合結成５０年おめでとうございます。
”教育”の難しさを日々痛感するとともにで組合活動がいささかやりにくくなってきたことに心配を憶えます。
しかし、昔も今も組合の仲間は私にとって非常に大切な財産です。
久しぶりにかっての仲間、そしてﾌﾚｯｼｭﾊﾟｰｽﾝにお会いできるのを楽しみにしています。

前田　靖男

祝５０周年。正しい方向を。

町田　高一

組合結成５０周年とのことで、改めて結成当時からの日本の状況を思い浮かべました

これからの一層のご発展を願いつつおります。

町田　茂

理学部支部結成５０周年おめでとうございます。

松井　英夫

京都で３０年商売をし、その間京都府知事は蜷川さんで労働組合が力のある時期でした。その時分から組合に加入していて集会に蜷川さんも出てこられよくお合いしたものでした。それが石油ショックの頃から商売がだめになり、京大に世話になって、早速今の組合に入会させていただきました。九年間動物学教室に用務員として勤務致しました。蜷川さんが退職された頃から組合を止める人が多くなり淋しくなりました。大企業が田舎まで進出し、大企業には金を貸し出すが、ちいさな商売には金を貸さない困った時代になったものだとおもえる今日この頃です。大変な時代ですが頑張って下さい。

的場　利三郎

５０周年おめでとうございます。
歴史を大切に飛躍をめざして力を合わせましょう。

宮川　和代

小生１９８０年に京大理学部を退職していますので、どなたが小生の事まで覚えていて下さったのかと不思議な気持ちが致します。
この激しく変遷した世の中と大学の５０年を振り返りますと懐かしさだけではない複雑な感慨が起こりますが、健やかな深みのある民主主義が発展することを心から願っています。

宗像　康雄

お招きありがとうございます。
５０年一昔と云う程年月が経ち只々驚いております。
当時の諸先生始め学生だった方達もなくなり淋しく思っております折り、喜んで出席させて頂きたく、よろしくお願い申し上げます。

森橋　　郁枝

京都大学職員組合理学部支結成５０周年
おめでとうございます。
焼け跡の中から仰いだもうＢ２９の来ない青空の美しさとその後のきびし食糧難は今でも忘れません。
５０年前我が国におこったこの悲劇は今でも世界のどこかでくりかえされています。
あの時子供心に感じた期待と不安の交錯が今でもつづいています。
平和と生活を守る防波堤としての職員組合に期待しています。

山岸　秀夫

５０周年おめでとうございます。
今後のさらなる発展をお祈りいたします。

山田　耕作

結成５０年おめでとうございます。
首長は代っても中味が中味なら国民の不安を除くことはできません。
京大職組の益々のご発展を祈念いたします。

山田　年広

二度目の関西大学教養部長、京大とちがって、ますます大衆化していくマンモス私大の今後のあり方にいろいろ考えさせられる毎日です、研究にも精出していますが、今は当時の理学部の生活がなつかしく思われます。皆様によろしく！！

山村　正俊

結成５０周年おめでとうございます。
輝かしい伝統のある貴支部にほんのわずかの期間でしたが、在籍させていただいたのは光栄です。
一層の発展をお祈りしています。

吉井　良之

今後の理学部支部の活動を力を合わせてがんばりましょう。

吉川　慎

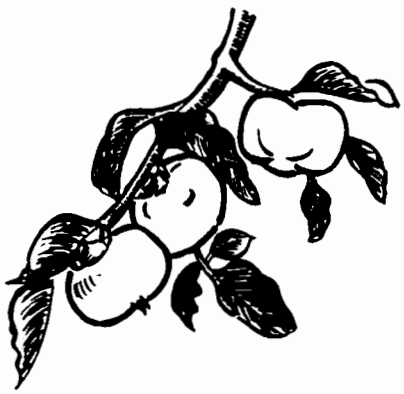
理学部支部よりのお手紙なつかしく拝見しました。５０周年を元組合員だったものとしてお祝い申し上げます。

1）平田支部長他組合員の皆様、それに記念講演をなさる西田さんにどうぞよろしく。
2）京都市長選挙で真の革新が勝利することを願っております。

米田　満樹

戦後まもなく、組合でサツマイモの買い出しに行った話しを今は亡き田中正三先生（化学・生化）からよく聞かされたものです。そのときどきで取り組む問題はちがっても、生活を守り、よりよい大学を求めて、しぶとく闘い続けた理学部支部に乾杯！　　そしてその５０年の、実に３１年間組合員であり続けた己にも。

和田　明



５．年表	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９４５年　８月 １２月	ポツダム宣言受諾第２次大戦終わる 女性に参政権、労働組合法公布	医学部真下教授他14名原子爆弾災害調査 広島で暴風雨の土砂崩壊で殉職
１９４６年　２月 ２月 ５月 １１月	第１次農地改革 極東軍事裁判始まる　１次吉田内閣 日本国憲法公布 大学設立基準設定協議会設置	京大初の女子入学者(17名) 食料科学研究所設置
１９４７年　３月 ４月 ６月 １０月	教育基本法公布・学校教育法公布 （６３３制） 労働基準法・独占禁止法・地方自治法公布 日本教職員組合結成 国家公務員法公布	創立５０周年記念式典を開催 京都帝国大学を京都大学と改称 京大職員に10日に１日の食料休暇 全教職員の特昇１号俸他大学より低い為
１９４８年　７月 １１月 １２月	マッカーサー公務員の争議禁止を含む公務員法改悪を要求。 芦田内閣＝政令201号団体交渉権 ストライキ権を剥奪 １１月に国公法改悪 極東軍事裁判終わる （東条英機ら７人絞首刑） 人事院発足	国立新制大学切替え措置要領（案）が文部省より送付される
１９４９年　１月 ３月 ５月 ６月 ７月 ９月	法隆寺金堂炎上 教育公務員特例法公布 ドッジ＝ライン発表 （日本経済安定策） 定員法可決 （国家公務員２８万人の首切り） 国立学校設置法公布 日本国有鉄道・専売公社発足 マッカーサー日本は不敗の 反共防壁と声明 下山事件・三鷹事件　８月松川事件 シャープ（税制の根本的改革）	京都大学消費生活協同組合設立 ４月新しい人文科学研究所成立（西洋文化研究所と東方文化研究所を吸収） 学生健康相談所を保健診療所と改称 吉田分校開校 5.7厚生女学院の不当人事学生６名処分 新制大学（京都大学）として再出発 ９学部（教養部は認められず） ８月京都大学通則制定 ９月学長選考基準案決定、被選挙資格が学長及び専任教授全員、任期が４年再選可、通算６年を超えることは出来ない 理教授湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞
１９５０年　２月 ４月 ５月 ６月 ７月 ８月	京都市長選、 初の高山義三革新市長誕生 京都府知事選、 蜷川虎三民主府政実現 京都市公安条例（行進・集会の規制） 共産党幹部追放指令 朝鮮戦争始まる レッド＝パージ拡大 国立大学協会創立 警察予備隊発足	教員停年規程：満６３才の誕生日に退職 学生運動激化 学内集会は学長の責任で行う事を目的として学内集会規程・学内団体規程を51年２月に制定 ３月末第三高等学校を廃止 ５月宇治分校開校

理学部支部５０年史	京大職組の５０年
組合結成前は組織形態論の論議が活発に行われた、Open, Closed, Union-Shopで	
2/13 京都帝国大学職員組合理学部支部結成 初代委員長　石橋雅義 教官・職員（全員加入） 食糧不足・衣料不足の時代, 物価はインフレで給料は月毎に増額	１月　工学部に職組支部連合誕生 医学部連合支部総会 京大職組結成準備中央委員会総会 (6/8) 事務局中心の京都大学教職員総会 物価統制令で月500円の生活　新円切換発行 中学校　食糧危機で夏休み早める
この頃は生命維持のために休暇を取って食料調達に行くことが認められていた 右の３組合を解散、京都大学職員組合に合流後、本部事務所は理学部植物学教室事務室に	・京都大学職員組合（医理工の教官中心450） ・京都大学教職員組合（事務職員中心1000） ・京都大学従業員組合（従業員中心250） 上記３つの組合の単一組合結成の気運高まる 2. 1ゼネスト参加を協議、後ＧＨＱ中止命令で中止 48年大学管理法反対運動始まる
大学管理法反対の運動が始まる。	3月13日　京都大学職員組合（全学単一）結成 ・労働条件維持改善、経済的地位の向上、学園民主化 2829人 組織率80％ 7月　京大職組初めての賃上げ要求等の１日スト 7. 22マッカサー書簡国家公務員法改悪、スト権剥奪 事務局支部幹部らストを理由に組合脱退 (50名)
副手の廃止による助手の増員、助手ポスト減を望む文部省は講師振替を提案、それを巡って組合内で対立が起こる レッドパージや第２組合結成に呼応して理学部事務室職員が組合脱退 理学部支部・学生自治会の共同闘争	基調：教育の機器、人員整理（希望退職の募集）、組合分裂（第二組合の結成） 組合員：1000名、組合費：収入に応じた定額制 日教組大学部との闘争体制緊密に 臨時職員の大量人員整理反対署名 京大生協への出資金22000円と決定 人事院勧告25％ (1570円) ７月９日事務局を中心に第２組合結成 教官有志、国立学校設置法に反対声明 10月全国教授連合レッドパージに対し学問の自由を保障せよと声明
理工系技術職員加配未獲得	基調：組合分裂攻撃、レッドパージに反対、大量の人員整理に抗議、京都府知事選挙の勝利、職場の民主化 組合員：846名（３月）913名（９月）登録人員 京都大学職員組合規約可決 (3. 18) 支部還元金１月１人１６円 支部へのの貸付金制度が活用 人事院勧告27％ (1750円）、実施は翌年１月から 第２組合は要求なしで低迷 臨時職員の大量人員整理で総長交渉 依然とした食糧危機：吉田首相の貧乏人は麦を食え発言の抗議

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９５０年１２月	地方公務員法公布 （スト禁止・政治活動制限）	
１９５１年　１月	日教組教え子を再び戦場に送るなのスローガン	
４月	マッカーサー解任	４月防災研究所設置
９月	サンフランシスコ対日講和会議 （対日平和条約・日米安全保障条約調印） 政府：共産党幹部第２次公職追放を強行	
１１月		11.12京大に天皇来学（京大天皇事件）
１２月		同学会再建
１９５２年　２月	日米行政協定	
３月	破壊活動防止法案・公安調査庁設置法案提出	４月　輔導部から学生部に
５月	メーデー事件	７月湯川記念館竣工
７月	破防法施行・公安調査庁設置	10月学生懲戒手続規程制定
１９５３年　３月	中国からの引き上げ第１船舞鶴へ入港	
４月	国立大学に新制大学院設置	大学院設置：８研究科
７月	スト規制法案（３年の時限立法）衆議院で可決	基礎物理学研究所付置（初の全国共同利用
９月	政府：保安隊を自衛隊に改組を決定	
１１月	荒神橋事件荒神橋で学生と警官隊衝突十人転落	
１２月	奄美諸島返還条約締結	法学部滝川幸辰教授学長に就任
１９５４年　２月	教育の政治的中立確保の教育２法国会提出	教養部規程を制定し分校を教養部と改称
３月	第五福竜丸水爆被災事件	４月工学部に電子工学科新設
６月	防衛庁設置法・自衛隊法成立	
７月	自衛隊発足	
１２月	造船疑獄で吉田内閣総辞職	
１９５５年		４月航空工学科再設置（46年廃止）
６月	第１回日本母親大会（東京）	京大滝川総長暴行事件 （同学会に解散命令）
８月	第１回原水爆禁止世界大会（広島）	７月医学研究科設置
１９５６年　１月	教育３法（新教委法・教科書法・教育公務員法）反対闘争始まる。	
３月	鳩山内閣：小選挙区制法案を国会へ提出	４月ウイルス研究所設置 学生懇話室を設置
５月	日ソ漁業協定　売春防止法成立	
６月	小選挙区制法案・健康保険改悪法審議未了廃案	
１０月	日ソ共同宣言（ソ連と国交回復）	
１２月	国連加盟　スト規制存続法：恒久立法で成立	

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
	基調：臨時大会で平和憲法擁護決定、行政整理反対決議、学内へ機動隊導入反対、学内民主化、組合分裂、レッドパージ　組合員700名、組合費滞納も目立つ 京大職組等特審局に共産党弾圧について抗議 人事院勧告40％（3450円）１０月実施 夏期手当要求で事務局長交渉 総長に行政整理反対の申し入れ（非常勤職員の整理） 年末賃金要求上申闘争 機動隊導入で総長室前座り込み（機動隊導入寸前解除
破防法反対の運動	基調：最低賃金制に基づくベースアップ、越年資金２ヶ月分獲得、給与準則人事院に反対、文教予算の大幅増額、　組合員620名、組合費：級による定額制 支部還元金20円／１人　年末賃金要求ハガキ闘争 人事院勧告34.3％(3450円) 千葉書記長不当逮捕
	基調：最賃制に基づくベースアップ、大学管理法反対憲法改悪・再軍備反対、組合員640名 組合創立５周年 吉田分校、高槻化研で親睦会組織で第２組合活発に 人事院勧告20.7％(2660円)実施時期なし政府は54.1.1 年末賃金要求闘争一律千円獲得 花谷会館座り込み実力行使100名、事務局長激励訪問 宇治分校地域給の引き上げ 欠員不補充、特昇、超勤で権力的支配：公開要求
理学部長選挙規定改悪反対の運動	基調：最低賃金制確立、生活と職場研究条件改善、平和と民主的権利擁護、組織拡大強化、 組合員650名　人事院勧告：給与改定なし（59年迄） 京都各大学憲法擁護教授懇談会：教育２法反対声明 夏期手当として事務は超勤10時間分 文・法・病で職員懇談会、文化サークル等組合員拡大
	基調：前年と同様　組合員683名 組合事務所時計台西の赤れんがの建物２階　人勧なし一時金0.25月分増 胸部研で看護婦の首切り事件、年末手当中央交渉で1.5ヶ月分獲得、託児所設置で初の事務局長交渉
	基調：生産性向上運動反対、最低賃金制確立、職場の民主化、職種別懇談会の開催、組合員拡大・組織拡大 組合員821名 農学部支部の事務系作業員の加入で50から100名に 人事院ベアなし勧告、３月期0.15特別給勧告、４月実施、年末手当0.15月分増額閣議決定 病院支部で４分の１が恩典がないと脱退 本年から給与支給日月１回になる 総長選挙権：専任講師以上となる 京都地区国公共闘会議結成
	基調：明るい生活を維持する賃上げ獲得、明るい職場

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９５７年　８月	東海村の原子炉点火 文部省勤務評定の通達	
１０月	文相都道府県教育長協議会に勤評実施要求、同協議会は実施を申し合わす	11月文部省科学技術者養成拡充計画発表
１１月	日教組：勤評反対非常事態宣言	
１２月	日ソ通商条約	医学部平沢興、総長に就任
１９５８年　１月	インドネシアと平和条約 米国初の人工衛星打ち上げ成功	科学技術振興と理工系学生増募政策により学科の拡充始まる
６月	勤評反対京都共闘会議結成	旧地球物理学教室新築
１０月	政府：警察官職務執行法案国会提出	４月原子核工学科、衛生工学科設置
１２月	警職法案、４次にわたる全国統一行動で廃案	課外教育活動研究委員会応募意見を公開
１９５９年　３月	安保改定阻止国民会議結成	数理工学科新設
４月	国民年金法公布 皇太子明仁・美智子結婚	
９月	伊勢湾台風５千人以上が行方不明	
１９６０年　１月	日米新安全保障条約調印（ワシントン） 三井鉱山・三池炭坑無期限スト突入	精密工学科、合成化学科新設 薬学部新設（医学薬学科から独立）
２月	政府：新安保条約批准案を国会へ提出	５月同学会・大学院学生懇談会主催で全学大会を開催、新安保無効、国会解散等を要求
６月	15日暴力集団の先導で学生が国会に突入３０万人の国会包囲デモの中１９日新安保成立	
９月	池田内閣：所得倍増計画を発表	
１０月	浅沼社会党委員長日比谷公会堂で右翼に刺殺	
１９６１年　３月	第１回国際見本市	薬学部製薬化学科、電気工学科第２、金属加工学科の増設（文部省の増募計画） 既設学科の拡充も同時に行った 技術課から施設部に 宇治分校を廃止、吉田分校に統合
４月	ソ連人工衛星ボストーク（ガガーリン搭乗）	
５月	自民・民社：政治的暴力防止法を共同提案 ケネディー米大統領南ベトナムへ派兵決定	
６月	農業基本法	
１９６２年　４月	政暴法案廃案 湯川秀樹らの呼びかけで第１回科学者京都会議	機械工学第２学科新設 経済研究所新設 化学科拡充（8講座から12講座に、64年完了）
１２月	日中民間貿易議定書調印 地方公務員共済組合法施行（恩給を廃止）	11月大学院白書発表（院生協議会）
１９６３年　１月	ライシャワー米大使：原潜の日本寄港を申入	４月国立学校設置法の一部改正：教養部設置　物理学科の拡充(8講座から17講座)
８月	原水禁大会分裂、部分的核実験停止条約に調印	数理解析研究所・原子炉実験所新設 農薬研究施設新設　東南ア研新設

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
超勤費問題：教室事務職員にも支給で事務長交渉。その結果事務室職員の２分の１が支給されるようになった。それまでは０だった。	をで、学内の民主化を、原子力兵器の使用禁止、原水爆実験禁止、研究施設の改善と定員の増を、組織拡大 組合員758名、非常勤書記１名から２名に 人事院：ベアなし一時金の改善、通勤手当の新設 常勤労務者の定員化36名 勤務評定の大学教員への適用反対
	基調：生活と勤務条件の改善、学内民主化、平和運動推進、組織拡大、文化厚生活動の活発化 組合員748名、組合１０周年記念行事 ２月京都憲法擁護教授懇談会：勤評反対声明 人事院：ベアなし、初任給の改善のみ 事務官定数183名配分、雇員が昇格、定年制の提案有
	基調：組合員教育重視、活動家養成、職種別・サークル別活動重視、看護婦要求結集、安保条約改定阻止 組合員750名、組合本部の移転　人勧ベアなし 京大有志教官：安保改定反対の要望書を政府に提出
超勤費の教室への配分闘争・安保闘争 （給与の補填として） 特昇の合理的格付け、不当号俸訂正、行２技術職員の特昇の大衆討議、行政職員の特昇教室・事務室職員の人数比での配分、教室の職員の特昇は組合に委任、行２、技術職員の履歴書再提出による俸給是正 定員外職員の定員化 職種別集会を全学に先駆けて実現 映画上映運動	基調：安保改定反対闘争、青婦部・作業員・臨時職員部会の確立を、病院看護婦、本部事務局で組織の確立を、サークル活動・宣伝活動の重視 組合員835名、組合費：定額制から一律0.7％ 安保闘争で組合拡大図書：21,理学：35,教養：20 文学:8、国公共闘の関係強化で事務職員の昇格要求等の比重増加し、体質改革始まる ５月　五者共闘安保反対三千人集会（図書館前） 人事院勧告12.4％（2680円） 給与格付けで当局交渉：文部省に上申措置させる 特別昇給公開、常務労務者の定員化等で総長交渉 定年制問題で強制退職を阻止
学部長選挙で組合推薦を再開宮地伝三郎氏が学部長になる	基調：安保反対、独占物価値上げ反対、大学制度改悪反対、大学自治の擁護、教員中心から職員中心の運動 組合員852名、学生部・蹴上化研支部の結成、組合役員手当制度の実施、 人事院勧告7.1％（1797円）１０月実施 託児所設立運動始まる 入試手当要求：事務局長交渉70万円の予算増額獲得 臨時職員の定員化36年打切、該当者360名定員化
	基調：大学管理制度法制化反対、階層別要求実現闘争 職種別部会確立、組合員924名 組合費の給与天引きで各支部交渉 人事院勧告9.3％（2496円）5月実施を10月実施政府値切る、入試手当増額、大学院手当8％に増額 １１月７日　大管法反対決起集会
	基調：京大職組創立15周年記念行事、青年婦人部結成 組合員974名、青年・婦人の結集、活動の中核 京大教官517名待遇改善の請願書を国会へ 人勧完全実施リボン闘争7.5％(2206円)経研支部結成

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９６３年　９月	松川事件の全被告の無罪確定	
１１月	三井三池鉱でガス大爆発458人死亡	
	22日　ケネディー大統領暗殺	農学部奥田東総長就任
１９６４年　６月	政府：公務員の定年制の方針を決定	建築学第２学科設置
７月	東海道新幹線開通	国立学校特別会計の制定（47-63年一般会計制）
８月	トンキン湾事件	
	米国ベトナム侵略本格化	数学科拡充（5講座から9講座）
１０月	第１８回国際オリンピック東京大会開催	バンデグラフ実験室新設
１１月	全日本労働総同盟結成	
１９６５年　１月	中教審期待される人間像報告	農学部林産工学科新設
２月	米国の北ベトナムへの大規模爆撃を開始	東南アジア研究センター新設 現化学教室、植物生態研究施設、ヘリウム液化装置室新築
３月	米国防総省ベトナムで毒ガス使用を発表	
１１月	日韓条約を自民・民社で強行採決	
１２月	朝永振一郎ノーベル物理学賞受賞 日本科学者会議結成	
１９６６年　１月	日ソ航空協定	物理学教室新築
６月	ＩＬＯ８７号条約発効 （組合登録、管理職の範 囲、勤務時間内の組合活動の禁止、専従役員）	保健管理センター設置
１０月	中教審：期待される人間像を発表	
１２月	佐藤内閣：共和製糖事件の追及をさけるため第54通常国会を招集し、冒頭解散（黒い霧解散）	
１９６７年　４月	美濃部亮吉東京都革新知事誕生	京大創立70周年 農学部食品工学科新設
１１月	日米首脳会談（小笠原問題） 政府：国家公務員の５％４万５千人の削減発表	生物物理学科新設（６講座） 霊長類研究所設置 結核研究所を結核胸部疾患研究所と改称
１９６８年　１月	米国：金保有高、過去30年の最低（ドル危機）	大学紛争始まる
３月	ジョンソン米大統領北爆部分停止、北ベトナムとパリ和平会談に応じると表明	
４月	小笠原諸島返還協定調印	
５月	ベトナム民主共和国と米国第１回パリ和平会談 定年制法案（地公法改正案）廃案	
６月	東大全共闘安田講堂を占拠	
７月	核拡散防止条約米英ソなど62ケ国で調印	
１１月	沖縄主席選挙： 屋良朝苗革新統一候補当選	
１２月	川端康成ノーベル文学賞受賞	
１９６９年　１月		寮生断交回答を不満とし学生部を封鎖

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
この頃支部ＢＯＸは数学の地下に有り？	組合員のしおり発行 保育所問題：病院に設置交渉始まる 年末年始宿日直手当増額要求実現
生活と権利を守る、平和を守る、組織拡大を柱に運動を展開。賃金、欠員補充、婦人部結成、臨職、生協、保育所等多彩な取組を展開した。民間労働者の実態調査で電気関係工場見学とビール工場見学 教官組合からの転換、行政職の強化を課題に組合員拡大:教官10.行政27	職組本部移転,教育の西側木造.京大内保育所設置決定 組合員1051名、役員手当制度廃止、初の職種別懇談会 大会議案書に支部活動掲載、人勧8.5%(2792円)9実施 ６月非常勤職員の会結成（400人）工研・薬支部結成 １１月青婦部から婦人部独立 非常勤職員の年末一時金要求運動 臨時職員全学決起集会(1/20)
特昇問題を活発に取り組む 学生自治会・院生協議会と共に北部生協食堂の改築運動でプレハブの食堂実現 この年、組合員拡大４６名	基調：運動の３本柱（職場要求実現、全労働者と団結して闘う、日本の政治をよくする 組合員1212名、結核研・原子炉支部結成 人勧7.2%(2651円) ９月実施、 電話自動化による交換手首切り反対 12月　日韓条約批准反対京大１万人集会（吉田Ｇ） 職員への白衣・靴の支給拡大、行二～行一へ振替 非常勤職員に１・５ヶ月ボーナス
支部規約を決定 青年層の加入を推進：北部構内青年交流会等を行う 超勤費の公開要求始める 大学財政公開要求を初めて公然と掲げる	基調：運動の４本柱（職場要求を基礎に、全国の仲間と団結し、日本の政治をよくする。国民の為の大学づくり）組合員1525名、工・病支部ＢＯＸ獲得 人勧6.9%(2820円) ９月実施 職組主催第１回運動会、病院保育所設立、行２～行１振替進む、職員証の職種名廃止京大職員一本化 独身寮の要求署名(500名) 年末一時金１万円要求闘争
化学70周年記念募金反対闘争:240坪の増築計画理学部協議会了承せず（７月） 大学財政公開：基礎資料集めが始まる。 本部事務局のつかみ取りの実態が明らかになり各支部で交渉行う	基調：４本柱と３課題（通年闘争体制確立、企業主義の克服、在籍専従体制確立：小山氏就任） 組合員1747名、組合費１%、人勧7.9%(3520円) ８実施 6月自衛官入学反対１万人集会,施設部支部誕生 12月　京大職組初めての非合法スト（円山600人）
1.25助手の大学院調整手当の支給を奥田東総長に上申(芦田学部長) ２月大学財政公開要求闘争の経過報告と討議資料を発行 助手の大学院手当、超勤費追加配分問題 支部ＢＯＸ宇宙物理の地下に獲得	基調：４本柱と３課題（企業主義克服、労働基本権、権利闘争の発展、職場闘争体制確立、組合員2118名 年間９回の実力行使体制の確立　人勧8%(3973円) 勤勉手当差別支給反対闘争：事務長会議が差別実施を決定(2/23),総長との徹夜交渉(3/8.9)実施撤回、但し６月は差別支給、１２月は差別撤回 独身寮実現（宇治60戸） 保育所の京都市認可実現（翌年４月より） 助手の３級格付け要求、教務職員の助手振替要求 教育三法粉砕闘争：早朝１時間実力行使、廃案で中止 大学の財政公開闘争すすむ 看護婦月８回複数夜勤の闘争（４４闘争）：１２月期に大幅増員の確約
２月超勤の公開勝ち取る。最高690H/10M	基調：大学自治の危機、組合活動破壊の攻撃、文部省

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９６９年　５月	国家公務員総定員法公布 東名高速道路全通	入学試験学外１１ヶ所で実施 大型計算機センター設置
６月	学園紛争拡大	大学立法反対京大理学部教官実行委員会発足（6.3）
７月	ジュネーブ軍縮会議に初参加	９月全共闘系学生時計台を封鎖占拠
１１月	佐藤・ニクソン会談	工学部前田敏男教授総長就任
１９７０年　２月	日本、核兵器拡散防止条約調印	京大創立70周年記念事業：寄付金18億円
２月	人工衛星おおすみ打ち上げ成功	体育館の建設と奨学基金の運用開始（11月着工）
３月	万国博覧会開催（大阪）	
３月	日航機よど号乗っ取り事件	
６月	日米安全保障条約自動延長	
１９７１年　４月	大阪府知事黒田了一当選 東京は美濃部、日本人工の４分の１が 革新自治体の元で生活	放射性同位元素総合センター設置 工学研究所を原子エネルギー研究所改称
６月	沖縄返還協定調印	
８月	ニクソン米大統領：ドル防衛の為ドル交換停止、東京株式市場史上最大の暴落（ドル・ショック） 円の変動為替相場制移行 １＄360→342円	
１９７２年　３月	高松塚古墳壁画発見 南ベトナム解放戦線、大攻勢を開始	
５月	15日沖縄祖国復帰	体育指導センターを設置
６月	革新自治体の老人医療無料化が進む元で、老人福祉法改正（７０歳以上無料化）73年１月実施 田中通産相：日本列島改造論を発表	
７月	埼玉県畑和革新統一知事誕生 田中内閣成立 ９．２９日中国交正常化	
１０月	岡山県野党が推す長野士郎が当選	
１９７３年　１月	ベトナムにおける戦争終結と平和回復の協定	
２月	変動為替相場制に移る　１＄264円	
４月	丸紅等総合商社６社の買い占め捜査 国民祝日法改正（振替休日の導入）	
５月	東独と国交樹立	

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
大学内人事に対する文部省の干渉に抗議する理学部協議会声明（4.28) 警察力と大学問題の文部次官通達に関する抗議声明（4,28) 4.14-5.20学部長室他占拠 大学立法反対国会派遣代表団(7.22)	機動隊、暴力学生集団との対決、大学民主化闘争、 組合員2215名,組合費１％+100円,人勧10.2％(5660円) １月　寮闘争委学生部封鎖　以後全共闘全学封鎖へ ９月全共闘の封鎖解除の為京大に機動隊２千人導入 五者連絡会議、総長と確認書（全構成員自治の確認 総定員法３年で５％削減行政:135名,教官:57名
学部運営の現状と問題点及びその改革の方向　報告２　理学部自治検討委員会 産学協同反対で三菱財団学術助成金の応募取り下げ運動（理院協） 助手部会評議員選の選挙権拡大で申入 自治懇談会発足（学部長選挙改革等）	基調：生活・権利擁護、本格賃闘、教育の反動化反対 国民的基盤に立つ大学を　組合員2100名 6.23安保廃棄スト、人勧12.67％（8022円） スト権回復・大幅賃上げ署名4000名集約（教職員66%) 北部食堂の建築認可 病院ボイラー事故
学部長選挙制度の改正 地鉱教授人事で公開質問状（地鉱院会） 同問題で支部、助手部会質問と要求 地球物理分会：Ｉ氏の退職勧奨はね返す ５月臨職闘争始まる 物１定員外職員の首切り問題 第２次定員削減反対、増員要求運動 増員要求委員会の設置 予算配分検討委員会	基調：命と暮らしと仕事を守る職場づくり、本格賃闘 スト権回復、中教審路線との対決、ベトナム支援 組合員2150名、組合費１％＋300円 人勧11.74％ 3.26定員外職員待遇改善大学部スト 5.26,7.15公務員共闘統一スト 12.15（病院：半日）ストに対する賃金カット(53名) 反戦・労権・全臨闘のスト破壊、組合攻撃の常態化 保育所120名規模に 市電撤去反対運動
理学部における定員外職員の実態と行政職定員増の必要性（増員要求委）出る 理学部事務室に組合が出来る テニス兼バレーコートの実現 組合干渉で学部長他 6H交渉 5.19スト理支部100人参加 理文化厚生部：魚釣り大会など 各種行事企画 定員外職員の組合費天引き問題で折衝 支部機関誌の名前募集始まる 私の異性観シリーズ ベトナム人民支援の運動始まる 飛騨天文台空ポストでM氏を定員化 増員要求で記者会見 新コートで北部バレーボール大会 10.11理学部支部機関誌　【いちょう】創刊号発行 学部長選に定員外職員の一般投票権をの運動始まる	基調：命と暮らしと仕事を守る職場からの組合づくり 国民的規模の生活防衛、国民春闘、労線の右翼的再編に反対し革新統一戦線の結成を、中教審の具体化阻止 組合員2143名、人勧10.68％(8907円) 本格的賃金闘争、予算闘争 春闘第２波統一行動けっき集会(3/31) 5.19,7.13公務員共闘統一スト（第２次中止） 11.20総長９分スト、12.19スト中止 第２次定員削減計画：５年間で212名 ＰＣＢ入りカーボン、水銀たれ流し問題 安全対策で東一条角切りの取組 科研費、設備費などの財政誘導による研究管理強化 東京教育大廃校、筑波大学法反対闘争 石油・土木における全臨闘集団暴行事件頻発 赤ヘル集団職組書記局襲撃　暴力一掃京大集会 交渉で京大職員健康安全管理規定を制定させる 北部青年部ベトナム人民支援の銀杏販売
1.10理学部評論創刊号発行 1.17学部長・評議員選改革討論会 1.25臨時協議会で定員外職員の一般投票権可決上記に向けて改革要求署名 全職員385人中321人集約 4.21学部長・事務長交渉：	基調：狂乱物価の中で本格賃闘、年末第２春闘、国民的課題闘争、筑波大学法反対、、暴力一掃、小選挙区制粉砕闘争　組合員2200名 人勧15.39％(14493円) 組合費1.3％+300円、臨時闘争資金0.25ヶ月 京大職組２５周年記念事業の取り組み 定員外問題時間内集会、年金スト(4/17)29分スト

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９７３年		６月評議会竹本問題の話し合い
８月	金大中拉致事件 人事院週休２日制の提言	部局長会議筑波大学法案に関する意見交換、教養・法学部教官有志の声明 理学部長の見解発表
１０月	江崎玲於奈ノーベル物理学賞受賞	
１１月	石油危機（生活必需品の買い占め売り惜しみ）	総長選改革論議活発に
１２月	年度末手当0.3ケ月の年内繰上支給	医学部岡本道雄教授総長に就任
１９７４年　１月	日中貿易協定調印 田中首相の東南アジア歴訪（各地で反日運動）	
２月	社会党京都蜷川不支持を決定 大橋出馬	京都大学創立７０周年記念後援会設立
３月	公務員共闘３万円以上の賃上げ要求を政府に	
４月	１１日春闘共闘空前のゼネスト	
６月	日教組幹部１９人が逮捕（4.11ストを理由）	賃上げ：3.05万円　団交権：非現業に認める方向
７月	人事院勧告 29.64% 31144円	
８月	香川県前川忠夫革新統一知事誕生	スト権：閣僚協議会設置１年半目途
１１月	滋賀県武村正義革新統一知事誕生 八鹿高校暴力事件発生	
１２月	佐藤栄作ノーベル平和賞受賞 雇用保険法公布	
１９７５年　３月	山陽新幹線開通 1月国際婦人年始まる	理学部附属機器分析センター設置
４月	神奈川県長洲一二革新知事他人工の４３％が革新自治体	定員なし、振替で 医療技術短期大学部を設置
５月	英国女王来日	
６月	公職選挙法改悪（政策宣伝の抑制）	
７月	沖縄海洋博覧会開催 育児休業法公布	
１２月	公労協８日間のスト権回復スト	
１９７６年　７月	田中前首相ロッキード疑獄で逮捕 南北ベトナム統一ベトナム社会主義共和国樹立	ヘリオトロン核融合研究センター設置 放射線生物研究センター設置
８月	鬼頭判事補検事総長名で三木首相にニセ電話	
１０月	国家公務員週休２日制試行	天皇在位50年記念式典を巡って賛否両派が時計台前で衝突、負傷者出る
１２月	総選挙自民党初の単独過半数割れ	
１９７７年　２月	初の静止衛星きく２号打ち上げ成功	環境保全センター設置
３月	鬼頭判事補罷免	６月評議会竹本助手の分限免職処分可決
７月	海洋２法実施（２００カイリ時代） 参議院選挙自民党からくも過半数確保 小中学習指導要領（ゆとりの教育、君が代国歌）	琵琶湖古環境研究施設(10年の時限施設) 地磁気世界資料解析センター認可 埋蔵文化財研究センター発足

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
要求支持する現認しない。4.27半日スト 各分会でたて看：コンクールも実施 約150人参加 ６月賃金カット全学45人　理は無し 筑波法反対の部長声明：協議会で可決 筑波法粉砕7.19ストしかし強行採決 暮れより学部の管理運営方式の改革論議 活発に　現理１号館竣工	スト権回復半日スト、筑波法粉砕２Hスト(6.1,7.19) インフレ手当要求スト(12.4):スト構えるが公務員共 闘が中止、期末手当の年度内繰上支給に 蜷川知事７選出馬要請 ８月京都で母親大会：京大会場１万人 11月経理部支部結成 第１次石油危機、トイレットペーパー買いだめ 北部青年部詩のサークル発足
インフレ、物不足、石油危機のもとで国民 の緊急生活防衛闘争が多方面で起こる 北部食堂の２階実現 4.10スト前日泊まり込み30余名 (スト権奪還は射程距離に入った)として ストライキ権が重要な闘争目標となった 81単産600万人が史上最大の統一ストに突 入。結果30％を超える賃上げを勝ち取った が、一方ではスト権は政府の厚い壁に阻ま れ、更に日教組に対する大規模な不当弾圧 が行われた ６月評議員選改革運動活発に ９月協議会：評議員選改革 講師・助手・職員は参考投票のみ 11月新制度の評議員選：参考投票結果は 無視される	基調：深刻な経済危機、反共反革新の逆流との闘い 国民春闘と発展方向、先述をめぐる大討論、定員・教 育予算闘争の成果　組合員2200名,臨闘資金7000*1000 人勧18.62％４月先払い含め29.64%(31144円) 京都国立大学教職員組合連合結成 4.11 国民春闘統一１日スト　京大91人賃金カット 出町三角州800人 理学部支部百数十名参加 75春闘を巡って情勢の見方・闘い方で大討論（多数結 集、革新統一戦線、組合民主主義など） 定員問題で大学当局が参議院文教委へ陳情 教育予算闘争で補正予算４億円余が配当 大学部(大学教職員の賃金,労働時間の基本的考え方) 第１次資料を発行 事務系５等級昇格、定員外頭打ち解消の闘い 大学院改革、教養部改革議論
理学部における研究教育の環境変化調査 報告（増員要求委）６月出る ８月夏休み作品展	基調：労働組合運動の転換期にふさわしい運動、仕事 を見つめる運動、国民のための大学づくり、職場から の創意ある運動　組合員2150名、組合費1.7%+300円 臨闘資金1500*1000 75春闘敗北声明、人勧10.86% 保育所問題：事務局長交渉（幼児保育所の実現約束） 日教組：主任制導入反対運動への参加 大学院改革のきざし：教養部廃止で学習討論
２月Ｓ共闘等理学部事務室占拠４日間 3.1解除 大津・天文台定削積み残しを理由に増員分 の採用抑制 １１月第１回理学部教研集会開催 11.7魚釣り大会（堅田の池）	基調：春闘巡って日教組での戦術論議、職場を基礎 にした創意ある運動、多数結集のための白書運動 組合員1980名、臨闘資金11500*1000,婦人部規約決定 76春闘第１波29分スト、76春闘網の目集会1000人 年末一時金0.2ヶ月カット、所得税減税で一定の成果 保育所問題：９項目合意、週休２日制試行：８週９休 第５次定員削減(142名) 青年部規約決定 人勧6.94% 婦人白書づくり　大学院設置基準の新設
３月日本歌声祭典に理合唱が京都代表で参 加した	基調：日教組内での戦術論議、京都府知事選全力投球 総長選挙制度改革の取組　組合員1926名 臨闘資金11500*1000,組合本部会議室第２期改修工事 木研支部独立、京都国公事務所が工学部支部へ 篠沢事務局長と定員・主任運用で６回の交渉 77春闘２年続き敗北、人勧6.92％(12500円)

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９７７年　９月	日本赤軍の日航機乗っ取り事件	
１９７８年　４月	京都府知事選林田悠紀夫当選 革新の灯消える	情報処理教育センター設置
５月	成田空港開港	
６月	春闘共闘：敗北宣言	
８月	日中平和友好条約調印	
９月	稲荷山古墳の鉄剣に銘文を発見	
１０月	有事立法反対全国集会、 元号法制化反対集会	京大会館完成
１２月	沖縄知事選革新県政に幕 一般消費税大綱	
１９７９年　１月	太安萬侶墓誌出土 大平首相一般消費税示唆	和進会労組弾圧事件 初の国公立共通一次学力試験実施
４月	東京・大阪革新知事敗北	理学部図書掛新設（４月）
６月	東京サミット	
８月	人勧：58才以上の昇級停止と週休２日制等勧告	全学的な公開講座：京都大学市民講座を開催（１０月）
９月	大平首相：総選挙前で一般消費税断念	京大初の外国大学との学術交流協定（パリ第７大学と）
１２月	衆参本会議一般消費税否定の財政再建を決議	農学部澤田敏男教授総長に就任
１９８０年　１月	政府：85年から公務員の60才定年制導入決定	
		医用高分子研究センター設置
６月	大平首相急死　鈴木内閣 史上初の衆参同日選挙自民党圧勝	
１１月	臨時行政調査会設置法、防衛３法、国鉄再建法、健保改悪法可決	
１９８１年　２月	ローマ教皇来日	
３月	第２次臨時行政調査会発足	超高層電波研究センター設置
１０月	福井謙一ノーベル化学賞受賞	給与の銀行振込始まる
	北炭夕張炭坑ガス噴出事故 （死者93名）	
１１月	行政改革関連特別法成立	
１９８２年　２月	国鉄改革共闘委員会発足（第２臨調が分割民営化の方向を打ち出したのに伴う答申阻止で）	国際交流会館完成（修学院）
６月	東北新幹線開通	
９月	給与関係閣議：財政非常事態宣言 （人勧凍結）	
１１月	上越新幹線開通	
１２月	総評労線対策委：全民労協に参加を確認	
１９８３年　３月	第２臨調最終答申首相に提出 中国自動車道全通（吹田－下関）	

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
	昇格闘争前進オレンジパンフ、朱い実120名保育所に
７月増員要求委員会の存続について議論 理協議会で廃止が過半数を超える １１月第３回支部教研集会：理学部のより良き将来像について（事務、技官、教員の分科会に他の職種も入って討論） 瀬戸の(当局の一方的)定員化問題	基調：京大職組３０周年、あたたかく、科学的で創造的な視点で原点に立ち返った運動の追求 組合員1879名、人勧3.84％(7269円) 仕事と職場を見直す職場総点検運動、組合員拡大年２回週間設定、本部に生活相談係の設置 岡本総長と年４回交渉：定員削減、予算、厚生施設等 78春闘３年続き敗北、 ４月杉村敏正教授（法）京都府知事選出馬一歩及ばず 定員外問題で国会議員との懇談 朱い実120・風の子90で210名、乳幼児併設園に
理学部中央図書館設置の議論始まる 12.1.2月教研集会：事務機構、図書館整備技官再編と専門官、教員組織等で討論を行った。　研究科長・学部長分離問題	基調：３つの基本的視点の活動（支部分会活動の重視教研活動を新たな段階に、大胆で大幅な組合員拡大） 組合員1857名、組合員拡大年２回の月間設定110名増 時間雇用職員組合費500円に決定 人勧3.7％(7373円) 79国民春闘総長１Ｈスト配置したが中止、集会に 4.25京大職組決起集会４ヶ所550名参加 綱紀粛正を口実とした公務員攻撃：既得権の剥奪 第５次定員削減強行(184名) 和進会労組つぶしに対する支援
1.8前田豊三氏死去(後に公務災害認定闘争始まる) 理学部事務機構の整備(行政職懇談会) （事務部制への移行）概算要求：支部での議論始まる 学生自治会BOXづくりで学部長と折衝	基調：職員組合の強化発展、支部分会活動の重視、教研活動の新たな段階へ　組合員1862名　人勧4.61％ 2000名の組合をで月間設定103名増：病院450名に 80国民春闘２波の早朝１Ｈスト（第２波中止） 5.16文人給109号総長発令者の頭打ち解消 事務主任の民主的配分の取組、 教員の待遇改善署名：１ヶ月で1000名
３月学部長選挙手続きへの文部省の介入が明らかに　４月理学部中央図書室開所 ７月協議会で主任懇談会検討内容公表（学部長選） 支部は学部自治推進委員会を作って検討 定員外職員の共済加入審査請求運動	基調：教職員の生活と権利擁護、平和と社会進出をめざす全国の仲間と国民のための大学づくりを 組合員1898名、ニセ行革臨闘600円/1人　人勧5.23％ ニセ行革反対中央行動：18支部63名参加　11528円 第19回国公立大学婦人集会（於：京大） 定員外職員：人事院へ共済加入の審査請求 行政監察反対の取組、給与振込で組合費の控除を約束
助手定数の講師定数振替概算要求運動始まる 2.20 浜林正夫教授(一橋大)学部自治を考える学習会 １０月第２次自治検討委員会報告	基調：核廃絶の世論に逆行する戦争準備反対、国民生活破壊の臨調反対、政財界の大学攻撃への闘い等 京大職組３５周年、組合員1830名　人勧4.58％10715円 鈴木首相財政非常事態宣言：人勧凍結 人勧凍結撤回署名3500名 永年組合員表彰の制度化 ４月川口是 元京大職組委員長 京都府知事選出馬敗北 定員外職員３年期限を撤廃させる取組 宇治５研究所事務統合の動き
１月協議会検討委員会報告を可決、手続改正委員会へ　２月協議会手続改悪可決	基調：戦後政治の総決算路線との対決、人勧値切り・凍結の打破、大学の行革、臨調に対置した職場からの要求闘争　組合員1800名、組合本部工東横に移転

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９８３年　４月	福岡：奥田八二 北海道：横路孝弘当選	
５月	日本海中部地震（死者102人、M7.7）	
６月	参議院議員選挙初の比例代表制	
１０月	ロッキード裁判田中元首相に有罪判決 レーガン大統領来日	
１１月	参議院：公選法、行革関連法、 防衛２法、２％値切給与法可決	
１２月	国公共済組合法改悪 （共済組合制度統合）	
１９８４年　３月	江崎グリコ社長誘拐 （青酸カリ入り菓子多出）	三年期限付き雇用（総長発令）
５月	国籍法・戸籍法成立 労働省：男女雇用機会均等法案を 国会に提出	
８月	日本たばこ産業法等関連5法成立4月 特殊会社化	
１０月	健保法改悪実施（本人１割負担）	
１１月	日銀：15年ぶり新札発行 （夏目漱石、福沢諭吉等）	
１９８５年　３月	米議会貿易不均衡で対日批判 中曽根首相ソ連書記長と会談	
４月	ＮＴＴ、ＪＴ、民間全電通発足	
５月	国庫補助金カット一括法案成立	
６月	労働者派遣法成立　施行86.7.1	
８月	日航ジャンボ機墜落 （520人死亡、４名生存）	
９月	文部省：国旗掲揚、国歌斉唱を教育 委員会へ	
１１月	日本プロ野球選手会に労働組合 証明交付	工学部西島安則教授総長就任
１９８６年　４月	男女雇用機会均等法施行	アフリカ地域研究センター設置
７月	衆参同日選挙で自民党大勝	
１０月	国連安保理非常任理事国に５年ぶり 当選	
１１月	国家公務員４週６休試行実施	
１９８７年　２月	政府：売上税、マル優廃止法案国 会提出 ＮＴＴ株上場（マネーゲーム過熱）	総合情報通信システム建設本部開設
４月	国鉄分割民営化　清算事業団発足	
１０月	利根川進ノーベル医学生理学賞受賞	
１１月	全日本民間労組連合会（連合）結成 大韓航空機ビルマ上空で消息不明	文学部博物館開館
１９８８年　３月	青函トンネル開業	胸部疾患研究所と改称
４月	瀬戸大橋開通 国家公務員４週６休実施	遺伝子実験施設設置

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
選挙権剥奪者による自主投票実行委員会結成	政府が人勧6.47％を2.03％に値切る暴挙 定員外職員３年期限付雇用問題：病院支部あげての闘い 行二採用抑制の文部省通知出る 60年定年制問題特別委員会設置 臨時教育審議会に反対する取組 臨時増簿受入問題
4.6前田豊三氏の公務災害認定	基調：軍事費を削って福祉教育への国民的運動、人事院勧告値切り打破、60年定年制実施に伴うあらたな定削、行２不補充に対して大学の職場を守り、定員化の新たな段階を切り開く　組合員1726名 組織財政検討委員会で組合費の上限枠設定案出る 10.26全国統一行動１Ｈスト(10年ぶり実力行使) 人勧改ざん6.44％を3.37％に 国際交流など専門職定数新設 60年定年制実施：勤務延長、定員確保など 共同保育所学内設置は認可園敷地内、建築要求で協議
２月理学部評論第10号発行(73年1月に創刊号発行) 教室系事務職員４名が人事異動 空きポスト６で定員化の運動を展開、 緊急支部集会、学部長折衝、庶務部長交渉 支部ニュース発行など行う 85.3建本事務長代理(庶務部長)６名は新規採用・人事異動で補充を言明 ９月事務機構改善懇談会発足（１回開催：機構図案提案)	基調：ニセ行革に反対し大学を守り発展させる活動、職場分会支部部会活動の重視と見える活動、国民的運動への発展に身近なところから　組合員1679名 退職者の会準備会発足：総長に要望 人勧5.74％(14312円)８級から１１級制へ移行 人勧で専門行政職表４省庁１３職種6000人適用 男女雇用機会均等法の施行(86.4.1) 助手の講師振替概算要求 技官部会：専門職確立のための提案 12月行政措置要求提出，事務改善懇談会発足 国鉄余剰人員受入に関する要望書
86年度見える組合運動を基調に進める 支部合宿で細野武男元立命大総長講演 第１回学部長杯バレーボール大会開催 事務機構問題等で学部長交渉37名参加	基調：職場職種を有機的に結び要求と制度しくみの問題を検討し政策提案活動を、大学部の組織改善等 組合員1646名、組合規約改正：書記次長３人制等 人勧2.31％(6096円)凍結から完全実施.第７定削(207) 保育所援助削減１０年計画実施　大審法国会提出2/16
事務機構問題、環境問題で学部長交渉、 事務長折衝は十数回 第２回学部長杯バレーボール大会 理学部門の西側にも門をつけさせる	基調：要求実現へ職場支部部会活動の重視、宣伝活動の展開、労働戦線の右傾化に反対、組織の強化拡大等 組合員1607名、組合費：上限6500円人勧1.47％3985円 土曜閉庁４週６休勧告、組合結成４０周年 連合発足で闘わない春闘へ 電話交換機デジタル化交換手問題 京都大学技術職員問題検討会の発足
総評解散、日教組大学部から全大教へ移行 等労働戦線をめぐる問題が中心 行政措置要求の昇格改善運動が盛り上る 理学部南門から北へ歩行者用道路を作る	基調：臨調行革、大学審、教育反動に反対、要求実現の創意的活動展開など、組合員1501名、組織部会確立 組合員名簿作成、全国大学高専教職員組合結成へ 人勧2.35％6470円寒冷地手当引き下げ

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９８８年　８月	リクルート疑惑発覚	
１２月	税制改革関連法案成立	国際交流センター設置
１９８９年　１月	７日昭和天皇死去　　土曜閉庁開始	
２月	吉野ケ里の墳丘墓発掘 学習指導要領改訂 （日の丸、君が代義務付け） 年金審：厚生年金65才支給の答申	
４月	消費税スタート	
６月	竹下内閣総辞職、宇野宗佑内閣成立	基礎物理学研と広島理研の統合
７月	参議院選挙で自民党惨敗	
８月	海部俊樹内閣成立	京都大学春秋講義開校
１１月	総評解散	
１９９０年　２月	自民党、総選挙で安定多数確保	初の大学入試センター試験実施
６月	90年度予算案参院で否決両院協議会を経て可決	京都大学学術情報ネットワーク機構発足 医用高分子から生体医療工学研究センター設置
１０月	反アパルトヘイト指導者Ｎ・マンデラの来日 統一ドイツ誕生 政府：国連平和協力法案を国会に提出	留学生センター設置
１９９１年　１月	日朝国交正常化交渉開始 湾岸戦争勃発	木材研究所を木質科学研究所と改称 大学院人間・環境学研究科設置
３月	湾岸戦争で多国籍軍に５０億ドルの支援	生態学研究センター設置
４月	ゴルバチョフソ連大統領来日 牛肉・オレンジの輸入自由化スタート	
５月	信楽高原鉄道事故（死者42人、負傷者576人）	理学部：大学院重点化概算要求提出
６月	雲仙普賢岳の火砕流報道・消防関係43人死亡	大学設置基準、短期大学設置基準、学位規則等の改定（設置基準の大綱化）
９月	バルト３国の独立を承認	
１２月	ソ連邦解体	医学部井村裕夫教授総長に就任
１９９２年　１月	ブッシュ米大統領来日	４月全学共通科目開講
１月	従軍慰安婦問題で日本政府が謝罪	４月法学部大学院重点化
３月	佐川急便スキャンダルおこる	国大協第四常置委
５月	国家公務員の完全週休２日制実施	『教務職員問題の検討結果報告』
６月	国連平和維持活動（ＰＫＯ）協力法成立、参院本会議で社共牛歩戦術（１１時間３０分）	１０月総合人間学部発足
１９９３年　６月	衆院本会議：内閣不信任案可決、衆院解散 武村正義新党さきがけ結成（１０人） 羽田派新生党結成（４４人）	３月教養部廃止、 ４月医学部大学院重点化開始　95年完成 ４月工学部大学院重点化開始　96年完成
７月	北海道奥尻島地震・津波・火災による災害 総選挙：新党グループが大幅進出	

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
役員選出困難, 対策委発足, 10月支部大会 行政措置要求支部報告集会 (11. 14)	１１月行政措置要求（婦人の昇格）：人事院が調査 時間雇用職員問題検討会を発足
前年の役員選出経過を踏まえ、対策委を早期に設置し選出のルールを確定 大津臨湖実験所訪問 定員問題プロジェクトチームを結成し定員問題・定員外問題に取り組む 郡役所支部ＢＯＸの床工事	基調：全大教結成と発展強化、労線問題対応の意思統一、職場要求実現、組合員1510名組合費1. 7％＋300円上限6500円　人勧3. 11％8777円 技術職員問題検討会座長私案でる 西島総長と定員外職員懇談会 期末手当の役職加算傾斜支給の強行 ３月給与と期末手当２分割、遅配される １０月京大職組全大教加盟決定　日教組と円満離別
市長選：大文字山ゴルフ場問題で活発に 理学部支部８９年度の活動は如何でしたかのアンケートで始まる総括議案 火山研Ｙ氏台風の被災カンパ活動 支部合宿（理学部の諸問題・定員・定員外・パート・大学を取りまく情勢など） 技官組織化問題議論活発に	基調：組織強化拡大と全大教活動を軸に要求実現、職場、支部部会の活動強化　組合員1516名 人勧3. 67％10728円, 期末手当差別支給, 夏期休暇新設 週４０Ｈ労働制度病院以外で試行 京都大学総合技術部・部局技術部発足 部局長会議で事務職員人員配置基本方針、異動女性登用、月20日雇用職員の任用変更問題
分会巡り (11月-1月) 技術部組織規定案説明会 (学部長) 職場巡り (3月～) 小選挙区制学習会 人件費学部留置の廃止、定員補充ルール凍結など（Ｍ学部長）の提案への対策 定員問題検討委員長との懇談	基調：全大教を軸とした要求実現活動、職場支部活動発展強化等、組合員1477名、人勧3. 71％11244円 組合体制検討委員会中問答申、組合本部現在地へ移転 第８次定員削減計画 (187) 看護婦確保法制定要求署名 (17700) 教務職員の助手への振替すすむ 図書館のパートによる土曜日開館問題 小選挙区制法案反対署名 育児休業法の施行と問題点 ＰＫＯ法案反対京大人集会
理学部の教育改革で教研 教養部 重点化で教員・職員のＷＧ 教務職員：理学部では重点化の概算要求で助手への振替を要求 組合に何を期待するかのアンケートを集約した	基調：全大教を軸とした活動で要求実現、政策宣伝活動、職場からの活動の活発化、組合員1473名 人勧2. 87％9072円　書記局体制を含む組織検討委員会 当局の交渉拒否で人事院への苦情申し立て 京大に教務職員問題検討会設置 定員外職員の忌引き休暇制度 (93. 1)　時間雇用1000名 予算の重点配分による分野間格差拡大
北部構内交通・環境問題（暴走族・シンナー等の対策）当局への申し入れ 第３キャンパス・新研究科構想問題論議	基調：大学院重点化、自己点検評価問題の意見集約、政策提起、定員予算で文部省への働きかけを、見える組合活動、組合員1436名　人勧1. 92％6286円 組織体制検討委員会答申 日々雇用職員の退職者懇談会への参加 京都大学将来構想検討委員会の試案, 第3キャンパス等 年金支給65才へ繰り延べ ２組ユニオンきりん結成、矢野教授セクハラ

	日本の戦後５０年	京都大学の５０年
１９９３年 ８月 １０月	細川連立内閣発足 小選挙区制導入の為の 政治改革大臣設置 エリツィンロシア大統領来日	
１９９４年 ６月 ９月 １０月 １１月	米不足問題、水不足問題 村山内閣発足（社会, 自民, さきがけ） 関西国際空港開港 大江健三郎ノーベル文学賞決定 小選挙区制区割法案成立	理学部で大学院重点化開始　95年完成 （数学、化学、地鉱・地球） 高等教育教授システム開発センター設置 京大自己点検評価報告書刊行 独立研究科第３キャンパス構想公表
１９９５年　１月 ３月 ４月	阪神淡路大震災 （震度7, 5500人を超える死者） 地下鉄サリン事件（死者12人、重軽傷者5000人 オウム真理教一斉捜査開始 東京：青島幸男 大阪：横山ノック知事誕生 東京外国為替市場1＄79円台を記録	 農学部大学院重点化開始　97年完成 理学部全専攻大学院重点化
１９９６年　１月	オウム真理教：宗教法人法による 初の解散命令 第９次定員削減閣議決定	独立研究科エネルギー科学研究科設置 文学部大学院重点化 経済学部大学院重点化開始　97年完成 原エネ研をエネルギー理工学研究所改組
１９９７年　３月	消費税３％から５％へ（４月） 教員任期制法案可決（６月）	総合情報メディアセンター設置 総合博物館設置 薬学部大学院重点化 理学部協議会が教授会に名称のみ変更 京大１００周年記念式典（１１月）

理学部支部の５０年	京大職組の５０年
支部討論集会 (大学院重点化で理学部はどう変わるか) 京都市長選景観問題学習会	
理支部事務体制検討ＷＧ(3月発足) 理支部事務体制検討委員会中間報告	基調：改革改組に必要な定員予算の確保を、セクハラ防止と人権擁護、週40H労働、学内厚生施設の充実等 組合員1400名、人勧1.18％3975円 婦人部結成30年 技術系図書系で退職時６級が確実に 日々雇用の実務講習参加、時間雇用雇用保険加入
部役所への不法入居者発見 動物別館への不法入居 （全教官による退去の説得） 支部ＢＯＸ２号館に移転（流し台設置）	基調：阪神大震災、オーム事件、薬害エイズ、住専等様々な問題の中で、大学改組、超過密労働を強いられながら前進を、組合員1369名、組合費上限6090円 人勧0.9％史上最低の勧告 人間ドック受験時の職務専念義務免除 時間雇用職員の職員録掲載 時間雇用職員の雇用契約更新（環境保全Ｃ） 定員外職員の英語研修の参加実現
技官の多数退職を控え、技術系職員等検討ＷＧ発足（当局） 2.17支部５０周年記念式典(７７名参加) 長期病休の代替職員の経費負担要求実現 支部教研：名大、阪大、工より招へい教室 事務の組織化は必要かで討議 (5.11) 大学院重点化で何が変わったか(6.6) 教室事務のＯＡ化が進む 組合員交流活動重視の方針で各種活動 教員任期制反対運動を活発に展開	基調：橋本行革で大学の在り方が根本から問われる中 結成50周年事業を進め、組合員減少傾向に歯止めを 組合員1342名、組合費上限6150円　人勧0.95％3336円 全大教へ委員長・副委員長を派遣 特別昇給制度教一３％枠を新設 日々雇用職員の２級枠外格付け勝ち取る
学部長選挙自主投票に時間雇用職員参加	基調：京大職組５０周年記念事業の成功を 組合員1335名、組合費1.6％+300円、人勧1.02%3632円 時間雇用職員の組合費値上げ提案否決 技術職員の訓令による技術専門官設置 時間雇用職員の給与支給日変更の突然の通知 98.4支給分より変更に押し切られる

6．理学部支部歴代四役（敬称略）

	支部長	副支部長	書記長
1996年	坂本　宏（物2）	平井　栄子（物1）	山田　良透（物2）
1995年	平田　文男（化学11月迄） 平田　龍幸（宇宙11月～）	平井　栄子（物1）	井川　淳志（物1）
1994年	田隅　本生（動物）	逸見　康夫（物2）	平井　栄子（物1）
1993年	加藤　利三（物1）	神谷　英利（地鉱）	大槻　義実（化学）
1992年	藤澤　久雄（植物）	前川　孝（物1）	平井　栄子（物1）
1991年	斉藤　衛（宇宙）	吉村　洋介（化学）	那須たみ子（地鉱）
1990年	尾池　和夫（地球）	藤原　顕（物1）	平井　栄子（物1）
1989年	宮地　英紀（物1）	田中　歩（植生）	大槻　義実（化学）
1988年	大矢　博昭（化学）	平田　龍幸（宇宙）	東　敏博（地球）
1987年	斉藤　衛（宇宙）	井上　敬（植物）	東　敏博（地球）
1986年	小山　博滋（植物）	尾崎　正明（物1）	東　敏博（地球）
1985年	米田　満樹（動物）	川平　浩二（地球）	山崎　里美（地鉱）
1984年	小林　芳正（地球）	笹尾　登（物2）	山崎　里美（地鉱）
1983年	富田　三朗（植生）	小淵　洋一（生物）	小出　三栄（事務）
1982年	田隅　本生（動物）	清水大吉郎（地鉱）	大槻　義実（化学）
1981年	小暮　智一（宇宙）	藤田　昇（植生）	大槻　義実（化学）
1980年	今井　敏子（地鉱）	山村　正俊（物2）	前田　靖男（植物）
1979年	岩槻　邦男（植物）	北尾　賢一（数学）	平田　龍幸（宇宙）
1978年	田中　正（物2）	西村　敬一（地球）	関　一（事務）
1977年	今井　敏子（地鉱）	藤澤　久雄（植物）	関　一（事務）
1976年	今井　敏子（地鉱）	田隅　本生（動物）	藤田　昇（植生）
1975年	志岐　常正（地鉱）	古子　陽昭（物2）	池内　了（物2）
1974年	田中耕三郎（地球）	中山　勇（地鉱）	篠沢　隆男（生物）
1973年	田中耕三郎（地球）	藤澤　久雄（植物）	小淵　洋一（生物）
1972年	田中耕三郎（地球）	藤澤　久雄（植物）	和田　明（物1）
1971年	中村　輝男（物2）	西谷　和子（生物）	益川　敏英（物2）
1970年	中村　輝男（物2）	今井　敏子（地鉱）	長谷川武夫（物2）
1969年	加藤　利三（物1）	今井　敏子（地鉱）	徳岡　隆夫（地鉱）
1968年	加藤　幹太（動物）	田中耕三郎（地球）	徳岡　隆夫（地鉱）
1967年	浅井健次郎（物1）	田中耕三郎（地球）	瀧本　清彦（物2）
1966年	志岐　常正（地鉱）	今井　敏子（地鉱）	瀧本　清彦（物2）
1965年	川那部浩哉（動物）	今井　敏子（地鉱）	永田　忍（物2）
1964年	井上　健（物2）		永田　忍（物2）
1963年	井上　健（物2）		清水大吉郎（地鉱）
1962年	三浦　澄三（動物）		志岐　常正（地鉱）
1961年	中山　勇（地鉱）		加藤　利三（物1）
1960年	中山　勇（地鉱）		
1959年	浅井健次郎（物1）		
1958年	浅井健次郎（物1）		
1957年			
1956年			
1955年			
1954年			
1953年			
1952年	藤波　重次（宇宙）		
1951年			
1950年	武藤　二郎（物理）		
1949年	滑川　忠夫（地球）		
1948年	田中　正三（化学）		
1947年			
1946年	石橋　雅義（化学）		

書記次長	年度	理学部長	事務長
堤　久雄（地鉱）	H8	鎮西　清高	木村　勇
氷室　智子（物１）	H7	鎮西　清高	宮部　芳郎
竹村　協子（事務）	H6	佐藤　文隆	宮部　芳郎
有田　広佳（物２）	H5	佐藤　文隆	藤井　文二
入野　健志（地鉱）	H4	丸山　和博	藤井　文二
平井　栄子（物１）	H3	丸山　和博	藤井　文二
入野　健志（地鉱）	H2	日高　敏隆	北山　正雄
富田　房江（地球）	H1	日高　敏隆	北山　正雄
入野　健志（地鉱）	S63	長谷川博一	北山　正雄
入野　健志（地鉱）	S62	長谷川博一	北山　正雄
入野　健志（地鉱）	S61	寺本　英	松村　昭一
入野　健志（地鉱）	S60	寺本　英	西村　真次
番浦（宇宙）-入野）	S59	巽　友正	西村　真次
小松　千代（地球）	S58	巽　友正	藤澤　正之
八木　定行（植物）	S57	山口　昌哉	藤澤　正之
島貫　岬（地球）	S56	山口　昌哉	藤澤　正之
春日井　昇（物１）	S55	加藤　幹太	堀内　祥二
小出　三栄（事務）	S54	加藤　幹太	堀内　祥二
竹村　協子（事務）	S53	林　忠四郎	位ノ花一郎
笹原百合子（火山）	S52	林　忠四郎	位ノ花一郎
八木　定行（植物）	S51	溝畑　茂	位ノ花一郎
内藤　吉道（植物）	S50	溝畑　茂	倉貫　孝正
伴　重夫（事務）	S49	森　主一	倉貫　孝正
池田ひろ子（物１）	S48	森　主一	倉貫　孝正
塩川　陸男（動物）	S47	加藤　幹太	倉貫　孝正
	S46	加藤　幹太	倉貫　孝正
	S45	富田　和久	久米太兵衛
	S44	富田　和久	久米太兵衛
	S43	芦田　譲治	久米太兵衛
	S42	芦田　譲治	久米太兵衛
	S41	後藤　良造	宮谷慶四郎
	S40	後藤　良造	宮谷慶四郎
	S39	速水頌一郎	宮谷慶四郎
	S38	速水頌一郎	宮谷慶四郎
	S37	宮地傳三郎	宮谷慶四郎
	S36	宮地傳三郎	宮谷慶四郎
	S35	友近　普	宮谷慶四郎
	S34	友近　普	生駒　正教
	S33	佐々　憲三	生駒　正教
	S32	佐々　憲三	生駒　正教
	S31	芦田　譲治	生駒　正教
	S30	芦田　譲治	生駒　正教
	S29	石橋　雅義	水野喜久三
	S28	石橋　雅義	水野喜久三
	S27	佐々木申二	水野喜久三
	S26	佐々木申二	水野喜久三
	S25	長谷川万吉	水谷　義雄
	S24	野津龍三郎	水谷　義雄
	S23	野津龍三郎	水谷　義雄
	S22	荒勝　文策	

７，編集後記

理学部支部５０年の歩みを発刊するに当たって、まず最初に発刊が随分遅れましたことを、関係各位に深くお詫び申し上げます。

私たち編集委員会は、本冊子を発刊に当たって、歴代四役に原稿の依頼をし、当時の思い出話等を寄稿して頂くべく努力をしてきましたが、寄せられたものは本紙掲載分にとどまりました。

また、この５０年間に支部ＢＯＸの移転が２回ありました。郡役所が支部ＢＯＸの時には、雨漏り騒動等もあり、現在の場所（２号館内）に移動後に資料を探しましたところ、紛失してしまっていることが判明しました。そこで、各自が保存している資料の提供を呼びかけ、一定集まった資料により、歴史をまとめるべく努力してきました。しかし、７０年代以前の資料は殆ど見つかりませんでした。その部分は、寄せられた思い出話や残っている資料からできる範囲でまとめることにしました。従って不十分なところがありますことをご了承いただきたいと存じます。

また、本紙発行後に支部５０年史に記入すべき事項、歴代四役の方の氏名等、新たに判明したことがあれば是非ともお知らせ下さい。保存用冊子に資料として追加して行きたいと思います。

最後になりましたが、本紙刊行に当たり、御協力や投稿いただきました方々には厚くお礼申し上げます。

本紙の刊行に当たって、参考文献として京大職組５０年史、京都市職労５０年史、京大工学部支部５０年史、京都大学百年史等を引用させて頂きました。

編集委員：冨田克敏、大槻義実、氷室智子